福音メッセージ集

何を求めて生きるか

重田定義

何を求めて
生きるか

重田定義

はじめに

このたび「何を求めて生きるか」と題する福音メッセージ集を出版することになりました。二十世紀も終わり、新しい世紀を迎えようとするときに際してこの本を出版できたことは、主イエス様のお導きによるものと感謝し、主の御名を心から賛美いたします。

今、二十世紀の終わりに立って改めて今世紀を振り返ってみますと、この百年は一口に言って科学技術の著しい進歩の世紀であったと言うことができます。この科学技術の進歩は産業、経済、情報通信、医学などあらゆる分野に及び、私たちの生活を大きく変えました。その結果、私たちの生活はこの世紀の間にたいへん便利に、快適になりました。しかし、いっぽうで今世紀は争いと殺戮の世紀とも言われるように、国家間、民族間の争いが絶えることなく、それによって多くの尊いいのちが失われました。また地球環境の破壊による気象異変とそれによる自然災害の増加、道徳心の喪失に基づいて生じたさまざまな問題や犯罪の増加、貧しい国では飢餓による大量死や著しい栄養失調、先進国では高齢者の

著しい増加によって生じる医療や介護を含む老人に関わるさまざまな問題などが新たに生じています。このように今世紀は物質的にはたしかに多くの人々に豊かさをもたらしましたが、それと引き替えに私たちは大きくかつ深刻なこれらの負の遺産を背負うことにもなりました。

では来年から新しくはじまる二十一世紀にはどのような明るい展望が期待できるでしょうか。残念なことに、二十世紀から受け継がれたこれらの負の問題は政治的にも、環境的にも、社会的にも容易に解決できるものではなく、むしろ新しい世紀にはさらに厳しさと混沌の度が増し加わるものと思われます。このような時代に生きる私たちは、この矛盾の中で真剣に生きようとすればするほど、生きる目標と喜びと希望を見つけることが難しく、苦しみ悩むのではないでしょうか。

しかし、万物の創造主として、すべての被造物を支配しておられる生ける神のみことばである聖書には、なぜこの世界がこのように混沌とした状態になったのかという理由と、どうすればこの暗やみの中に光を見いだすことができるか、どうすれば喜びと希望と平安に満ちた生き方ができるかという、人間にとってもっとも大切なメッセージが明確に記されています。「何を求めて生きるか」と題するこの本は、これまで私がキリスト集会や家

庭集会で聖書のみことばをわかりやすくお話ししたメッセージの中から十二篇を選んで編集したものであり、この中には前に述べましたことへの解答がすべて含まれております。どうかお読みになるお一人おひとりの心にこの本をとおして神様が働いてくださり、まだイエス・キリストを信じておられない方も、またすでに信じておられる方も、この世界に生きる私たち一人ひとりに対するあわれみと愛に満ちた神様の大きな深いみこころを、ぜひとも知っていただきたいと心から祈る次第です。

今回の本の表紙には、画家である三浦泉兄弟がお描きくださった、「再会」と題する樹木の油絵を用いさせていただきました。この絵は一本の樹のように見えますが、三本の樹が縦に重なった一本の樹として表わされており、十八年前に天に召された愛する娘まりと私たち夫婦との天の御国での再会を三浦兄がこのように表現してくださいました。表紙のデザインの労もとってくださり、また中見出しとしてイギリス取材旅行の際のスケッチをも提供してくださった三浦兄に心から感謝いたします。また、この本の出版について終始協力し、祈ってくれた妻都代子に感謝します。

二〇〇〇年十二月

重田定義

目次

はじめに …… 3

一　何を求めて生きるか …… 9

二　暗やみからの脱出 …… 29

三　主は彼の後ろの戸を閉ざされた …… 45

四　ほんとうの満足とは …… 63

五　代価を払って買い取られた者 …… 81

六　キリスト者の良き行ないとは …… 99

七　新しい歌を主に歌え …… 117

八　イエスの御名において …… 133

九　無価値な者を顧みられる主 …… 149

十　御子を信じる者がひとりとして滅びることなく
あるキリスト者の葬儀でのメッセージ……165
十一　天の御国目指して歩む旅人……183
十二　終わりまで歩み、休みに入れ……201

一　何を求めて生きるか

わたしを見いだす者は、いのちを見いだし、主から恵みをいただく。
（箴言8章35節）

今日は、かぎりある人生に何を求めて生きていけばよいのかという、たいへんに大きくかつ深刻な課題について、ごいっしょに考えていきたいと思います。実はこの問題提起は、最近ある女性、仮にNさんとお呼びしますが、その方からいただいた手紙にありました。まずNさんの手紙をご紹介します。

Nさんの手紙

突然お手紙を差し上げるご無礼をお許しください。私はK市に住む二人の子どもを持つ三十九才の看護婦です。今年のはじめ頃から生きることの空しさを強く感じ、聖書の伝道者の書の「空しい、空しい」は私のことでした。生きる意味、生きる目標を求めてまいり

ました。友人の導きから「光よあれ」（注：キリスト集会発行のキリスト者による証し集）を読む機会も与えられました。すべてのことを神様に尋ね、頼り、ゆだねていけばよいことも友人に教えてもらいましたが、私にはできません。現在私は育児休業中ですが、十月から職場復帰をし、看護婦の仕事をしなければなりません。重田様が医師であることを「光よあれ」で知りました。的はずれな質問をしてしまいますが、同じ医療に携わる者として助言をしていただけたらと思い、思い切って手紙を書きました。

一……すべてのことに神の時がある……産まれる時から死ぬ時まで、すべて、すべて神の支配（愛？）の下で人間は生き、いつ笑い、いつ泣き、いつ結婚し、出産し、何の病気で何年何月に死ぬのかも、すべて、すべて決まっている。しかし、それは神の愛であるから、神が定めたのだから、悪いようにはなされないのだから、定められた時を神に感謝し、神に口答えすることなく、喜べなくても喜び、生きていくべきなのでしょうか。

二……すべては神から発せられた……人間も動物も草も花も神が造られたもの、人間の最大の敵である死の原因となり得る病原菌も神が造られたのでしょうか。病も神が造られたのでしょうか。死さえも神の愛なのでしょうか。永遠のいのちがあるにしろ、ないにしろ、人間はかならず死んでしまいます。いくら病気が治っても死ぬ。交通事故でも死ぬ。

かぎりあるこの世の生活に何を求めて生きていけばいいのでしょうか。職場に復帰しても、このままの状態でいると、どうせ死んでしまうのに、おそかれ早かれ同じなのにという、心の奥底から湧いてくる気持ちに負けて仕事ができそうもありません。どういう気持ちで患者さんに接していけばいいのでしょうか。どうしたら、どうせ死んでしまうのだから、何をしても空しい、何もかも空しいという気持ちから解放されるのでしょうか。

身勝手で支離滅裂なお手紙を差し上げ申し訳ありません。お時間のある時にぜひお返事をいただきたいと存じます。

Nさんへの返事

このように率直かつ真剣に人生の空しさについて訴えておられる手紙をいただいたのははじめてでした。文面からはNさんが必死で求めておられるのが伝わってくるようでした。

私は次のような返事をお出ししました。

お手紙拝見しました。あなたの疑問は、まじめに人生を考えるとき、また真剣に聖書を読むときに起こってくるたいへん重要な問題です。どの程度あなたの質問にお答えできるかわかりませんが、イエス様に祈りながら示されたことをお書きします。

あなたが挙げた二つの疑問、すなわち、すべてのことに神の時があるなら、定められた時を感謝し、喜べなくても喜んで生きていくべきか、そしてすべては神から発せられたのなら、死も病も神が造られたのか、死さえも神の愛なのか、という問題はどちらもイエス様を信じる信仰の基本に関連している大切な問題であると思います。

喜べないことでも神の定めとして感謝すべきか

まず、喜べないことでもこれを神の定めとして感謝すべきか、という問題です。結論から先に言えば、その答はお手紙の最初のほうで、あなたの友人が言われた「すべてのことを神様に尋ね、頼り、ゆだねていけばよい」ということに尽きます。しかし、あなたは自分にはできないと言われます。そのとおりです。それは自分の頭で理解しよう、自分の力で無理にしようとするからで、できないのがとうぜんなのです。そしてここに信仰の奥義が隠されているのです。どうしてできないのでしょうか。それはあなたが、まだ聖書の神様、すなわち天地万物の創造主であり、全知全能の唯一まことの生ける神様と、その神様からこの世に遣わされた神のひとり子イエス様との霊的な出会いをしておられないからなのです。ではイエス様との出会いとはどういうことでしょうか。

知ることと信じることの違い

あなたは聖書を読んでおられますし、その内容もよく理解しておられるようです。ですからイエス様がキリストであることも知っておられると思います。しかし、いくら聖書を知っていても、イエスがキリストであることを知っていても、それはイエス・キリストを信じていることとは違うのです。知識として知るということは頭で理解するのであり、頭で理解しようとするかぎりはイエス様に出会うことはできません。

イエス様を信じるのは頭ではなく、心に信じ受け入れることなのです。そしてそのためにまずなすべきことは、あなたが心を閉ざしたり、あるいは自分やこの世に向けるのではなく、意識して天に向けて、すなわち神様に向けて大きく開けることが必要です。次に今あなたの心にいっぱいになっている、いろいろな思い煩いを空にすることです。もちろん、それも自分の努力でできるものではありません。しかし、ちょうど水に溺れそうになって、もがけばもがくほど沈むそのとき、もがくのを止めてからだの力を抜けば、からだがすうっと浮くのと同じように、思い煩いにあがくことを止めて力を抜けば、すうっとあなたの心は空になります。

こうして心を神様に向けて開き、心の中を空にしたとき、イエス様は心の中に入ってくださり、あなたと出会ってくださいます。そのとき、あなたははじめて開かれた心の目で、霊の目でイエス様が自分のために何をしてくださったか、また今も何をしてくださっているかということを見ることができ、心からイエス様に感謝し、これからこの方に信頼して生きようという思いが与えられます。すなわち、あなたは、それまではイエス・キリストの十字架と復活を知識として知っていたのが、イエス様との霊的な出会いによって、それはほかならぬあなたを愛してくださるがゆえに、あなたの罪を贖い、永遠のいのちをくださるためにしてくださったみわざであるということを、すなおに心に受け入れることができるようになります。これがイエス様に出会ってイエス様を信じるということです。イエス様を信じればもう安心です。

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

（コリント人への手紙第一1章9節）

と聖書にあるように、あなたはあなたを罪から贖い出してくださった救い主イエス様との霊的な交わりに入れられ、イエス様はあなたとともにいてくださって、これからずっと導

いてくださるからです。

イエス様と交わるには

しかし、私たちはイエス様と、どのようにして交わることができるのでしょうか。それは祈ることと、神様のみことばを食べることによってです。祈りはイエス様との会話です。空をつかむような、とらえることのできない対象に向かってではなく、あなたを愛してくださり、あなたの傍らにおられる生けるイエス様に対して、正直に自分の思うことをお話しすることが祈りです。ですから祈りには形式はありません。ただ祈るときには他のことに気を散らすことなく、聞いてくださるイエス様に心を集中して真剣に祈ることが大切です。はじめに「イエス様」と呼びかけてから祈ると、イエス様が身近に感じられます。そのように祈るとき、イエス様はあなたの祈りを聞いてくださいます。そして、かならず答えてくださいます。もしあなたの祈りがイエス様のみこころにかなう祈りであれば、そのようになるでしょう。けれどもかならずしもあなたの願いどおりにはならないこともあります。しかし、それはイエス様があなたの祈りを聞いてくださらなかったからではなく、あなたを愛しておられるがゆえに、あなたの願っていることとは別のことで、あなたを

もっと、もっと恵もうと考えておられるからです。聖書に、

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ人への手紙4章6～7節）

とありますが、これが祈りの秘訣です。イエス様に真剣に祈るとき、イエス様は聞いておられる証拠に、あなたに平安な思いを与えてくださいます。

また、みことばを食べるとは読むこととは違うのです。読むというのは頭の働きによりますが、みことばを食べるのは心で、霊でしなければなりません。あなたが心でみことばを食べ、みことばを味わうならば、みことばによって心が、霊が養われます。みことばは心が、霊が生きるのに必要な、なくてはならない大切な栄養源なのです。イエス様は聖書のみことばによってご自分のお考えをあなたに示されます。あなたはみことばによって慰められ、元気づけられ、励まされ、喜びと平安と希望が与えられます。そして、もっとみことばを食べたいと思うようになります。エレミヤという預言者は次のように言いました。

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

（エレミヤ書15章16節）

このように、イエス様に出会って、イエス様と祈りをとおして、またみことばをとおして霊的な交わりを持つようになれば、あなたはもう、お手紙の中でおっしゃっていた「喜べなくても、神の定めとして感謝しなければならないのか」という悩みから解放されている自分に気がつくと思います。

いのちと死について

次にあなたが投げかけられた、「死も神の愛なのか」という問題について考えてみたいと思います。これは言いかえればいのちと死の問題であります。イエス様はご自分を羊飼いに、ご自分を信じる者を羊にたとえて次のようにおっしゃっています。

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなこ

とはありません。

（ヨハネの福音書10章27～28節）

ご自分のいのちをかけてあなたを狼から守ってくださるイエス様が、みことばによってこのように約束してくださっていますから、イエス様を信じる者は安心してイエス様に自分をゆだねることができるのです。ですから死をも恐れることはなくなるのです。

私たち人間が考える死とは、からだの死であり、生物学的な死です。しかし、聖書で言うところの死はからだの死に留まりません。神様から永遠に見捨てられ、滅びるという肉体と霊の死を指します。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ人への手紙6章23節）

と聖書にあるように、死は人間の原罪、すなわち私たち人間を造り、愛してくださっている神様に背を向けて自分の思いを満たした最初の人アダムの罪を受け継いだ私たちが、ひとり残らず生まれつき持っている罪に与えられた報いなのです。しかし、神様はそのような私たちをなおも顧みてくださり、滅びることのないように御子イエス・キリストをこの

世にお遣わしになり、イエス様を信じる者に神様の賜物として罪の赦しと永遠のいのちをくださったのです。イエス様を信じていても、汚れているからだは神様が定められた時が来れば、病や事故や老いによって一度は死にますが、霊はただちに天国のイエス様のもとに帰り、そこで安らかに憩うことができます。しかも死んだからだはそのまま墓の中で朽ち果ててしまうのではなく、

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。

（ヨハネの福音書11章25～26節）

とイエス様が約束してくださったとおり、イエス様を信じて天国の国籍を与えられた者は、復活され天に戻られたイエス様が信じる者を迎えにふたたび来てくださるそのときに、イエス様の復活のからだに似た、決して朽ちない聖いからだによみがえらせてくださるのです。ですから、この希望を持つ者は、

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同

じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ人への手紙3章20～21節）

と確信をもって待ち望むことができるのです。

イエス様によって生きる意味と目的を見い出す

聖書の中の伝道者の書にある「空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう」という言葉は、この世だけがすべてであると思っている人、この世のいのちがすべてだと思っている人にとっては真理です。このように思えば、生きる意味も、生きる目的もなくなって当然です。しかし、イエス様を心から自分の救い主と信じた者にとっては、この世は天国への旅路に過ぎず、自分はほんとうの故郷である天国への道をたどる旅人であることを知るのです。そしてこの世に生きる意味は、自分を救ってくださったイエス様とともにこの世の旅路を天国まで歩むことであること、この世に生きる目的は、生きる意味も目的も失って絶望している人々に、このイエス様を紹介すること、自分をとおしてイエス様の愛を提供することであることを示されるのです。

あなたは「すべてのことに神の時がある」ということが、また「すべてのことが神から

発せられた」ということが、どうも納得がいかないようでした。納得がいかない大きな原因は、すべてのことという中には自分にとって、人間にとって好ましくないようなことが含まれるからです。しかし、それは人間を中心とした考え方に基づいているのです。人間中心の考え方とは、天地万物の創造主であり、全知全能の神が、すべての被造物の主としてこの世を支配しておられるのにもかかわらず、自分を中心として宇宙が回っている、神様も自分のために存在していると思って疑わないことです。ですから自分にとって好ましくないことはどうしても受け入れたくないのです。

しかし、イエス様を信じ、イエス様を心に受け入れるとその考え方は一変します。自分に与えられた神様の愛と恵みがどのように大きいかを知るからです。聖書に、

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ人への手紙8章32節）

また、

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神が

すべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。
（ローマ人への手紙8章28節）

とありますが、これがイエス様を信じた者のイエス様と神様に対する信頼です。ちっぽけな私たち人間にはほんの目先の幸せしか理解できませんが、神様は私たちのために私たちの考えも及ばぬはるか先の幸せまで考えてくださっているのです。この確信があれば、神様が定められたものはすべて、神様から来るものはすべて、私たちにとって好ましくないと思われる病も、老いも、死でさえも、すべて益と変えてくださると、感謝して受け入れることができるのです。だからこそ、すべてのことは神様におゆだねしていけばよいのです。

長くなってしまいましたが、あなたの疑問に対する答になったでしょうか。どうかあなたが、あなたを愛しておられるイエス様に出会うことができ、イエス様とともに生きることこそが生きる意味であることを知り、そこに生きる目標を見い出すことがおできになるように心から祈っております。

このような内容の手紙に添えて、私の書きました福音メッセージ集「私たちはキリストに会った」という本をお送りしました。その後Nさんのことを祈っておりましたら、少し

して次のようなお手紙をいただきました。

お返事ありがとうございました。「私たちはキリストに会った」拝読させていただきました。ご本までいただきありがとうございました。この空しい人生を何とかして頑張って充実したものにしなければ……ともがき、もがき生活しておりました。重田様がお手紙に書いてくださったように、もがいて、もがいて沈んでいってしまいました。何かをつかまなければと、聖書を読んだり、証しやメッセージのテープを聞いたりしておりました。もがき、苦しみ、必死になるのを意識してやめるようにしました。イエス様のことを心から信じることがどんなことなのか、まだ私にはわかりませんが、「神様、あなたがほんとうに全知全能の神で、御子イエスがほんとうに私の救い主であるのなら、そのことを私にわかるようにしてください」と正直に祈るようにしました。いただいたご本とお手紙を何度も何度も読ませてもらっています。読んでいると心が落ち着きます。ほんとうにありがとうございました。

私はイエス様が確実にNさんの心に働いておられることを、この手紙をとおして確信することができ、

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。

たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

（ルカの福音書11章9～10節）

わたしを見いだす者は、いのちを見いだし、主から恵みをいただく。

（箴言8章35節）

というイエス様のお約束がそのとおりであることを覚えて心から主に感謝しました。

Nさんはお手紙で「イエス様が自分の救い主であることがわかるようにしてください」と祈っておられますが、イエス様は私たちにご自分が救い主であることを啓示される場合、私たちの閉ざされた霊の目を開くために神の御霊を送ってくださいます。御霊によってはじめて私たちはイエス様に出会うことができるのであります。イエス様は十字架にお架かりになる前に、弟子たちに次のようにおっしゃっています。

わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。

（ヨハネの福音書15章26節）

またパウロも御霊の働きについて次のように書いています。

「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。

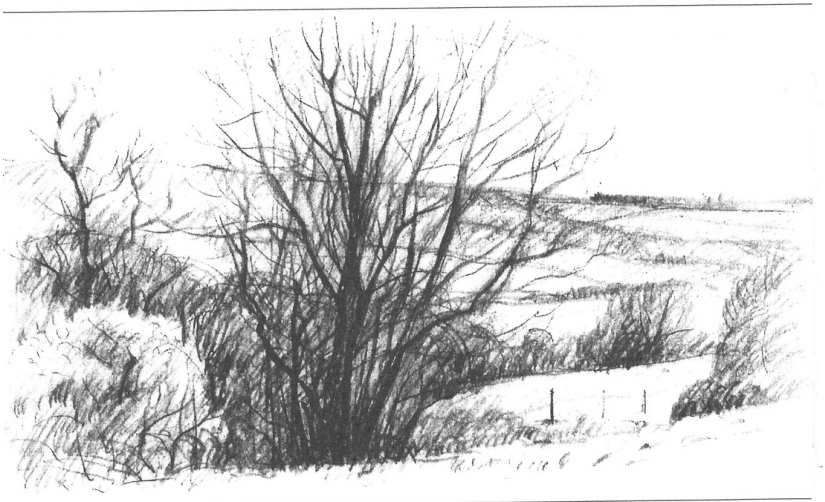
（コリント人への手紙第一２章９～12節）

「恵みによって神から賜わったもの」、すなわち私たちに対する神様の恵みの賜物のなかで最大、最高の賜物はイエス様であります。Nさんにかぎらず、どなたでもイエス様のことを知りたいと心から願うときに、イエス様は御霊を助け主として送ってくださり、神の賜物であるご自身に出会わせてくださいます。そしてその方はイエス様によって新しく生まれ変わり、永遠のいのちをいただき、自分の知恵や力に頼って生きることの空しさから解放されて、イエス様に頼って生きることを喜ぶ人に変えられます。

最後にイエス様のみことばをお読みして終わります。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

（マタイの福音書11章28～30節）



3月のバース市郊外
イングランド

二　暗やみからの脱出

からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。

（マタイの福音書6章22～23節）

肉眼の失明と霊の目の失明

今日はこのみことばについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。昔の人は、目はからだの窓で、そこから光が体内に差し込むと考えていました。この考えに基づけば、目が健全なら全身は明るく、目が悪ければ全身は暗くなります。イエス様はこのことを比喩的に取り上げて、「霊の目が健全なら、からだの中に差し込む光はからだ全体を明るくするが、霊の目が悪ければ差し込む光は暗く、からだ全体を真っ暗にする」とおっしゃって

いるのです。これは霊の目が悪ければ、いくら肉体の目から光が体内に入ったとしても、その人間は霊的な暗やみの中に置かれているということを指しておられるのです。

視力を失うことを失明と言い、明るさを失うと書きます。この言葉のとおり、もし目が見えなくなれば私たちは明るさを失って、昼間でも真っ暗やみの中に置かれるのと同じ状態になります。そうなれば、どの方向に進んだらよいのかわからずに、間違った道に迷い込んだり、この道が正しいと思って選んだのに違ったり、また、自分の前にどんな障害物があるのかわからずに、つまずいたり、衝突したり、あげくの果てには大怪我をしたり、いのちを失ったりします。

しかし、暗やみには肉眼の視力が失われたときに生じる暗やみのほかに、霊の視力が失われて生じる暗やみがあるのです。したがってこの暗やみは霊的な暗やみと言ってよいでしょう。このように霊の目が失明して霊的な暗やみに置かれた人間は、肉眼が失明した場合と同様に、霊的な意味で自分がどこに向かっていったらよいのかわからず、つまずいたり、ころんで怪我をしたり、自分では正しい道を選んだつもりでも、滅びの死に至る道をそれとは知らずに歩むことになります。イエス様が「もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう」とおっしゃったほどに、霊の暗やみは恐ろしいものなのであ

ります。しかし、肉眼の失明に気づかない人はありませんが、霊的な失明はほとんどの人が自分ではまったく気づかないために、今申しましたような恐ろしい結果を招くことになります。神様から世界一の知恵を授けられ、聖書の中の箴言や伝道者の書を記したソロモン王は、

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。（箴言14章12節）

と言っていますが、ここで言っている「人の目」とは霊的に失明している人の目のことであり、霊の目が失明しているために曲がった道も真っ直ぐに見えてしまい、その曲がった道は死の道に通じているというのであります。

霊的な失明が生じる原因

では、このような恐ろしい霊的な失明は、だれに、また、なぜ起こるのでしょうか。霊的失明は悪者に起こるのです。前述のソロモン王は、

悪者の道は暗やみのようだ。彼らは何につまずくかを知らない。（箴言4章19節）

と言っています。しかし、彼が言う悪者とはだれでしょうか。預言者イザヤは悪者とはこのような者だとイザヤ書の中で言っています。

悪者はあわれみを示されても、義を学びません。正直の地で不正をし、主のご威光を見ようともしません。主よ。あなたの御手が上げられても、彼らは認めません。

（イザヤ書26章10～11節）

悪者とは、創造主であり、全能の主であり、万物の主権者である生ける神様がみずからお造りになり、支配しておられる自然をとおし、歴史をとおし、また私たち一人ひとりの人生をとおして、ご自身のみわざを、またみこころを、慈愛を示しておられるのに、その神様に目を向けようともしないで、生ける神様の働かれるこの世界で自分勝手に自分の知恵、力に頼って生きている者、すなわち私たち自身を指します。これは霊の目が失明している結果であり、霊の暗やみの中で生きているために神様のお考えも御手のわざも見えないのであります。イザヤは神様から離れた人間の霊の状態を次のように書き表しています。

私たちは盲人のように壁を手さぐりし、目のない者のように手さぐりする。真昼でも、たそがれ時のようにつまずき、やみの中にいる死人のようだ。

（イザヤ書59章10節）

やみの中に光として来られた神の御子イエス様

このような惨めな人間を見放さず、なお愛してくださるあわれみ深い神様は、二千年前に暗黒のやみのこの世にご自分のひとり子イエス様を光としてお遣わしになりました。ヨハネは次のように証言しています。

この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。

（ヨハネの福音書1章2～5節）

イエス様ご自身も、ご自分について次のように言っておられます。

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。

（ヨハネの福音書8章12節）

イエス様は霊的失明者がやみの中を歩むことがないよう、やみに打ち勝つ「いのちの光」を与えるために、この世にご自身が光としておいでになったのです。そして今のみことばでイエス様が約束なさったように、イエス様を罪の暗やみから救い出してくださる方と信じて従う者の霊の目を開いてくださり、やみに打ち勝つイエス様のいのちの光を持つ者としてくださるのです。

イエス様は「霊の目が見えるようにして欲しい」と心からへりくだって願う者には、かならずその望みをかなえてくださるお方であります。それはイエス様が盲目の乞食の願いをかなえて、目が見えるようにされたエピソードからも知ることができます。

イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫び立てた。すると、イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言った。

すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると、盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

（マルコの福音書10章46～52節）

この盲人は暗やみの中で長い年月を貧しく生きてきました。盲人なるがゆえに乞食にならなければならなかったのかも知れません。彼は暗やみの中で長い年月苦しみ、そのために心が砕かれていました。彼はどんなに光を望んでいたことでしょうか。そういうときに彼はあちこちで多くの病人を癒されたイエスという方が町に来られる、というわさを聞きました。彼はうわさを聞いただけで、この方こそ自分の盲目を癒してくださる方だと確信したのです。それは彼がイエス様に向かって「ダビデの子のイエス様」と呼びかけたことからわかります。「ダビデの子」とは神様がダビデ王に約束された契約の成就者、すなわち救い主のことであり、彼はイエス様こそがその救い主だと信じたのです。イエス様は彼の信仰を喜ばれ、「あなたの信仰があなたを救った」とおっしゃって、即座に目が見え

るようにしてくださったのです。

このエピソードの中の盲人は、実は霊の暗やみに置かれた私たちでもあります。私たちも、自分は今どこにいるのだろうか、どの方向に進んだらよいのだろうかと、暗やみの中を手探りしながら途方にくれて悩み苦しんだときに、イエス様のうわさを聞き、この方だけが自分をやみから救い出してくださる方と信じて、心から「イエス様、助けてください」と叫べば、イエス様は直ちにご自身のいのちの光によって私たちの霊の目を開いてくださり、やみから光の中に移してくださるのです。そして、

その日、耳しいた者が書物のことばを聞き、盲人の目が暗黒とやみの中から物を見る。

（イザヤ書29章18節）

とあるように、今までは自分の頭で理解しようとしてもできなかった神様のみことばである聖書を、イエス様の光によって開かれた霊で深く味わうことができるようになり、その恵みを心から喜ぶようになるのです。

しかし、そのような心砕かれた人々ばかりではありません。むしろ自分の悪い行ないを隠すのに都合のよい暗やみを愛し、光であるイエス様のもとに来ようとしない人々も多く

います。聖書は次のように言っています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。

（ヨハネの福音書3章16～20節）

けれども、そのような者もイエス様は見放されずに、あわれみと愛をもって次のように呼びかけてくださるのです。

まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに光がある間に、光の子どもとな

るために、光を信じなさい。

（ヨハネの福音書12章35～36節）

暗やみを照らす光としてこの世に来られたイエス様が「光がある間に、光を信じなさい」と言われた「光がある間」とは、父なる神様の救いをあくまで拒む不敬虔な者をさばくために、イエス様がやがてこの世にさばき主としてご再臨なさるときがまだ来ない間、すなわち「今のとき」を指しておられるのです。そのような神様のあわれみにもかかわらず、なお光の子となるのを拒み続ければ、その人は暗やみの中を滅びに向かって歩むしかありません。

光の子にも生じる霊的な暗やみ

さて、霊的な暗やみは、神などいないとうそぶいて自分勝手に生きている霊的失明者に生じるだけではありません。神様の恵みによって一度霊の目が開かれてイエス様を信じ、光の子とされたにもかかわらず、その恵みに馴れ、傲慢にも自分の力で目が見えるようになったような気がしたり、また自分の力に頼っても信仰の歩みが正しくできると思うとき、その人は霊的な暗やみの状態にあるといえます。イエス様はそのようなキリスト者に対し

て次のようにおっしゃっています。

「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える。』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」

（ヨハネの福音書9章39～41節）

さて、イエス様によって、失明していた霊の目が開かれてイエス様という光を見る恵みにあずかり、心からその恵みを感謝し、喜んでいれば、だれでもその恵みを自分ひとりが享受するだけではなく、光であるイエス様を暗やみの支配のもとで苦しんでいる人々に紹介しようという強い思いを抱くのではないでしょうか。イエス様が、

わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中

にあって御国を受け継がせるためである。

（使徒の働き26章17～18節）

とパウロにおっしゃっていますが、それはイエス様に救い出されて神のしもべとされたキリスト者にも当てはまることなのです。

ところがその神のしもべたちも、もし光であるイエス様から目を離すと、たちまちサタンの罠にかかって霊の目がふさがれ、ふたたび暗やみの中を歩む危険に陥ります。そうなると何が主のみこころか、何がみこころでないかの見分けもつかなくなり、人を正しく主のもとに導くことも、また主にある兄弟姉妹を愛することもできなくなります。神様はそのようなしもべのことを次のように嘆いておられます。

わたしのしもべほどの盲目の者が、だれかほかにいようか。わたしの送る使者のような耳しいた者が、ほかにいようか。わたしに買い取られた者のような盲目の者、主のしもべのような盲目の者が、だれかほかにいようか。あなたは多くのことを見ながら、心に留めず、耳を開きながら、聞こうとしない。

（イザヤ書42章19～20節）

イエス様は口先では神様を敬っているようでも、心は神様から遠く離れている律法学者

やパリサイ人について次のようにおっしゃっています。

彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。

（マタイの福音書15章14節）

これはイエス様に従うと言いながら、実は自分の考えによって人に指図したり、教え導こうとするキリスト者にも当てはまることであります。このような霊的に失明して暗やみにあるキリスト者は、自分がイエス様をお入れしている、たんなる器であって、その器を用いてイエス様ご自身がご栄光を現わされるということがわかりません。そして自分の考えによってイエス様のみこころとは違った方向へ人を導いたり、また自分の考えによって神の愛ではなく人間愛、すなわちヒューマニズムの実践こそが正しい信仰の行ないであると錯覚してしまうのです。このように、いったん神のしもべとされながら霊の目がふさがれた者は、自分がやみの中を歩んでサタンの仕かけた穴に落ち込むばかりか、人までも道連れにするということになるのです。

ではこの暗やみから脱出するにはどうしたらよいのでしょうか。それには自分がイエス様から離れていたことを心から悔い改めて、光の主であるイエス・キリストに立ち返るこ

とであります。そうすればイエス様は直ちに聖霊の目薬を注いで失明した霊の目を癒してくださり、ふたたび光そのもののイエス様を仰ぎ見ることができるようにしてくださるのであります。イエス様はキリスト者に対して、次のようにおっしゃっています。

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

（ヨハネの黙示録3章15～19節）

キリスト者は、このイエス様のみことばを忘れないようにしなければなりません。そしてせっかくイエス様に癒していただいた霊の目がまた盲目にならぬように、いつもイエス

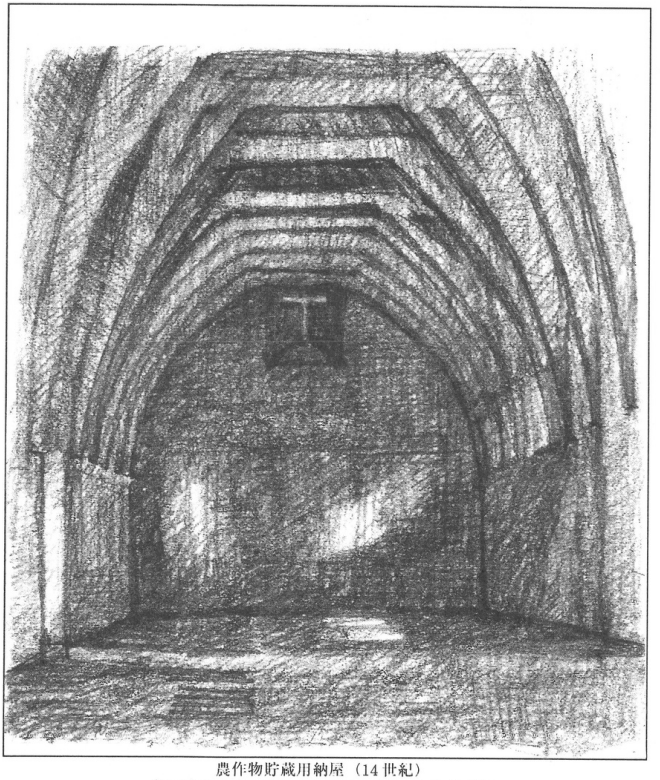
様から聖霊の目薬を点眼していただくように心がけることが必要であります。パウロはキリスト者に次のように勧めています。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

（エペソ人への手紙5章8節）

「主にあって光となる」ということは、自分が光り輝くことではありません。やみの世を照らす光であるイエス様にしっかり結びついたときに、そのイエス様の光を反射することができるということです。以前は暗やみの子であった者が、イエス様の愛によってこのような恵みをいただいたキリスト者は、またとやみに戻らぬようイエス様に聖霊の目薬を点眼していただきながら、光の子としてイエス様の光を反射する燭台としての歩みを続けることができるように祈ることが大切であります。

また、イエス様をまだ信じておられない方は、どうか光がある間にイエス様を信じてイエス様からいのちの光をいただいて光の子となってくださるよう心からお祈りいたします。



農作物貯蔵用納屋（14 世紀）
イングランド、ブラックフォード オンエイボン

三　主は彼の後ろの戸を閉ざされた

ノアは、ノアの息子たちセム、ハム、ヤペテ、またノアの妻と息子たちの三人の妻といっしょに箱舟にはいった。彼らといっしょにあらゆる種類の獣、あらゆる種類の家畜、あらゆる種類の地をはうもの、あらゆる種類の鳥、翼のあるすべてのものがみな、はいった。こうして、いのちの息のあるすべての肉なるものが、二匹ずつ箱舟の中のノアのところにはいった。はいったものは、すべての肉なるものの雄と雌であって、神がノアに命じられたとおりであった。それから、主は、彼のうしろの戸を閉ざされた。

（創世記7章13～16節）

今日はこの聖書の箇所の中から「主は彼の後ろの戸を閉ざされた」というみことばの意味についてごいっしょに考えてみたいと思います。

聖書を読んだことがなくても、創世記に記されているノアの箱舟の話をご存じの方は少

なくないのではないでしょうか。それほどよく知られてはいても、これを私たち人間に対する、さらには自分に対する神様の警告として真剣に受け止める方はどのくらいおられるでしょうか。

悪と暴虐に満ち満ちたノアの時代

ノアがなぜ箱舟を作り、その中に入ることになったか、その理由は創世記に次のように記されています。

ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤペテを生んだ。地は、神の前に堕落し、地は、暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、実に、それは、堕落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を造りなさい。

（創世記6章9～14節）

主はノアに仰せられた。「あなたとあなたの全家族とは、箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代にあって、わたしの前に正しいのを、わたしが見たからである。あなたは、すべてのきよい動物の中から雄と雌、七つがいずつ、きよくない動物の中から雄と雌、一つがいずつ、また空の鳥の中からも雄と雌、七つがいずつを取りなさい。それはその種類が全地の面で生き残るためである。それは、あと七日たつと、わたしは、地の上に四十日四十夜、雨を降らせ、わたしが造ったすべての生き物を地の面から消し去るからである。」ノアは、すべて主が命じられたとおりにした。

（創世記7章1～5節）

人間は、天地万物を創造された聖にして義なる神様が、ご自分と交わり、みこころを知ってそれに従うようにと、ご自分のいのちの息を吹き込まれてお造りになった特別な被造物であります。ところがその最初の人間アダムがサタンの誘惑に負けて、神様に背くという罪の道を選んでしまいました。その結果、アダムは神様との正しい関係を失い、神様の前に堕落した状態に落ちてしまったのです。この堕落した状態はアダムの遺伝子を受け継ぐ人間すべてに及び、そのためノアの時代には地上は悪と暴虐に満ち満ちたさまになっ

ていたのです。

しかし、ノアだけは「正しい人」「全き人」であったとあります。これは完全無欠という意味ではなく、神様の仰せに忠実に従う人、すなわち神様との関係において正しい人ということであります。「ノアはすべて主が命じられたとおりにした」とあるように、まったく洪水の兆しが見られなかったときに、ノアは疑うことなくただ神様の仰せにすなおに従って、巨大な箱舟を造りました。そのようなご自分に忠実なノアを、神様はご自分の前に正しい者とお認めになったのです。

人類を滅ぼされるために起こされた大洪水

ノアたちが箱舟に入り、主が彼のうしろの戸を閉ざされてから七日後に、神様がおっしゃったとおりのことが起きました。雨が四十日四十夜降り続いた結果、大洪水が地の表を覆い、地上のすべての生き物は死に絶えたのです。

聖書には、水は百五十日間も引かなかったと記されています。今年は世界各地で大洪水が起こり大きな被害が出ましたが、ノアの洪水はそれらとはとうてい比較にならない地球規模の大きさだったのです。その間箱舟の中の様子と外の状態はどんなだったでしょうか。

神は、ノアと、箱舟の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。

（創世記8章1節）

と記されていることからわかるように、神様は箱舟の中のノアたちをずっと守ってくださいました。ノアも自分たちを守ってくださるという確かな信頼を神様に置いていましたから、百五十日もの長い期間、多くの動物たちとともに平安に過ごすことができました。箱舟の中は主の平安に満ちていました。

いっぽう箱舟の外には恐ろしい光景がありました。高い山々もすべて水没するほどの大洪水の中、避難するところはどこにもなく、人間を含めてすべての生き物は荒れ狂う大水に流され、助けを求めながら溺れ死んでいったのです。その差はどうして生じたのでしょうか。それは神様の仰せに従って生きていたか、あるいは神様に背き自分の思いに従って生きていたかの差であります。その差が生きるか死ぬかという大きな相違となったのです。

今の時代とノアの時代

さて、ノアの箱舟の時代からはるかにくだった今日、世界の状態はどうでしょうか。私

たちの目にする世の中の状態はまさにノアの時代と同じように、いやそれ以上に悪と暴虐が満ち満ちていると言えるのではないでしょうか。世界中で戦争、テロ、麻薬、強盗、殺人、暴行、詐欺、裏切りなど数え上げればきりがないほどの事件が毎日起こっています。それは相変わらず人間が神様に背を向けて、自分の思いを満たすことだけしか考えないような勝手放題な生き方をしているためであります。自分はそのようなことはしていないと思う方も少なくないと思いますが、神様は人の心の中をご覧になる方ですから、行為として外に現われなくても心に思うだけで行為をしたのと同じと見なされます。イエス様は次のようにおっしゃっています。

「姦淫してはならない。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

（マタイの福音書5章27～28節）

このように、私たちの心に少しでも良くない考えが浮かんだとき、神様は私たちがすでにその行為をしたと見なされるのです。ですから私たちがいくら否定しようとも心の中には神様からご覧になれば悪が存在しているのです。イエス様はさらに、

人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。

（マルコの福音書7章20～23節）

とおっしゃっていますが、私たちが謙虚に自分自身を顧みれば、だれでもイエス様が心から出る悪として挙げられたうち、全部ではないにしてもいくつかは自分にもあると認めざるを得ないのではないでしょうか。

次は火によって人類を滅ぼされる

では神様はこのような罪に汚れた人間を滅ぼされるためにふたたびノアのときのような大洪水を起こされるのでしょうか。もし起こされるとすればそのときはいつであり、またそのときノアのように救われる人はいるのでしょうか。このたいへんに気になる疑問に対して聖書は次のように記しています。

まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもが

やって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。

（ペテロの手紙第二3章3～7節）

これによって、神様はノアの時代には洪水を起こされて不敬虔な者を滅ぼされましたが、今度は洪水ではなく火によって滅ぼされるということがわかります。具体的に火が何を指すものかは今私たちにはわかりませんが、洪水よりもさらに恐ろしいものであることは想像できます。そしてその日はいつかについてはイエス様は次のようにおっしゃいました。

いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。まことに、あなたがたに告

げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、のんだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

（マタイの福音書24章32～39節）

「人の子」とはイエス様のことであります。私たち人間を滅びから救い出すために貧しい人の姿をとってこの世においでになり、十字架による贖いのみわざを成し遂げられて天に戻られたイエス様は、今度は悪と罪に満ちたこの世を滅ぼされる偉大な神として、神々しい姿でふたたびおいでになります。今引用したみことばの少し前で、イエス様はその前兆として偽キリストが現われて人々を惑わしたり、大地震や民族間の争いが起こるとおっしゃっておられ、それを夏が近くなったときのいちじくの木の枝と葉の変化にたとえて説

明されました。今の世の中の有様はまさにそのとおりの状況であります。しかし、ご再臨のその日がいつかは父なる神様のほかはイエス様もご存じないけれども、ただノアの洪水の日と同様に突然来るとはっきりおっしゃっているのです。

滅びを免れるには

ではこのような恐ろしい事態から脱出するにはどうしたらよいのでしょうか。そのときが来てからではもはや手遅れであることは今までごいっしょに見てきたとおりであります。もし今の時代にもノアの箱舟があれば、手遅れにならないうちに入りたいとだれでも思うのではないでしょうか。しかし今の世にはノアの箱舟は存在しません。では私たちはただ滅びるのを待つだけなのでしょうか。その心配はありません。義そのものの神様は同時に愛に満ちた方であります。神様はノアの箱舟に代わる、いやそれとは比べものにならぬほどのすばらしい救いの舟をすでに提供してくださっているのです。その舟こそ私たちを滅びから救い出してくださるために救い主として神様が遣わされた神のひとり子イエス様であります。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子

を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

（ヨハネの福音書3章16～17節）

このように、すでに神様は二千年前にイエス・キリストというすばらしい救いの舟を提供しておられたのです。ではこの舟に入るにはどうしたらよいのでしょうか。もう一度ノアがどうして箱舟にはいることができたかを考えてみましょう。ノアが箱舟に入ることができたのは神様から正しいと認められたからでした。ということは、私たちも神様から正しいと認められればよいのです。では私たちが神様から正しいと認められるにはどうしたらよいのでしょうか。「これからは真面目に清く正しく生きる努力をします」と神様に誓えば、神様はそれを認めてくださるでしょうか。あるいは、いっしょうけんめい社会に役立つ行ないや善き行ないを積み重ねて、その成果を神様に認めていただくことでしょうか。それでは駄目なのです。前にも申しましたように、人間の心の中まで見抜かれる神様は、私たちの心に「清い生き方をした、善行をした」という誇り、高ぶりが少しでもあれば、いくら努力しても正しいとはお認めになりません。それではどうしたらよいのでしょうか。

イエス様は有名なたとえをお話しになっています。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆすする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

（ルカの福音書18章9～14節）

神様が正しいと認められるのはこの取税人のように心が砕かれ、自分の犯した罪を心から神様に謝る者であります。私たちもこの取税人のように自分の罪を認めて神様の前にへりくだって心から謝罪したときに、神様はイエス様が十字架上で流された汚れのない聖い

血によってその罪を聖めてくださり、私たちを義、すなわち正しいと認めてくださるのです。聖書に、

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

（コリント人への手紙第二5章21節）

とあるとおりです。

主が扉を閉ざされる前に

さてイエス様という救いの舟に乗るために、私たちがどうしたらよいかは以上ではっきりしました。しかし、次のように考える方があるかもしれません。「イエス様という舟に乗るためにどうしたらよいかはわかった。けれども自分はその前にまだやりたいことがあるから、イエス様の舟に乗るのはそれが終わってからにしたい」と。しかし、その方はいつイエス様が救いの舟の扉を閉められるのかご存じなのでしょうか。冒頭の聖書の箇所に「それから、主は、彼のうしろの戸を閉ざされた」とありました。ノアたちが箱舟に入った後、箱舟の戸はノアが中から閉めたのではなく神様の手で外から閉められたのです。一

度神様によって閉められた戸はもう決して開かれることはなく、閉ざされてからではいくら中に入りたいと望んでも決して入れません。それと同様にイエス様もときが来れば救いの扉をご自分の手で閉ざされます。そして一度閉ざされた扉は決して開かれません。

ではイエス様が救いの扉を閉ざされるときはいつでしょうか。一つはその人のこの世における生を主が終わらされるときであります。私たち人間は自分のこの世のいのちをいつ終わりにするかを決めることはできません。自分のいのちの終わりのときを知ることはできません。聖書に、

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。

（ヤコブの手紙4章14節）

とあるとおりです。主が私たちのこの世のいのちの扉を閉められた後からでは、いくら叫んでも遅いのです。

もう一つのときは、先ほど引用した聖書の箇所にもあったように、イエス様がふたたびこの世に来られるご再臨のときであります。イエス様は恐ろしい永遠の滅びからひとりで

も多くの方を救おうと、愛と忍耐をもって扉を閉ざすときを延ばしておられますが、それにも限度があります。どうかまだイエス様を信じておられない方は、聖書に、

確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

（コリント人への手紙第二6章2節）

とある、その恵みの日、救いの日である今、手遅れにならぬうちに一刻も早くイエス様のところに飛び込む決心をなさるように心からお祈りいたします。

また信じる者のためには、イエス様はご再臨への心構えを、花婿を迎える五人の愚かな娘と五人の賢い娘のたとえによって説明しておられます。

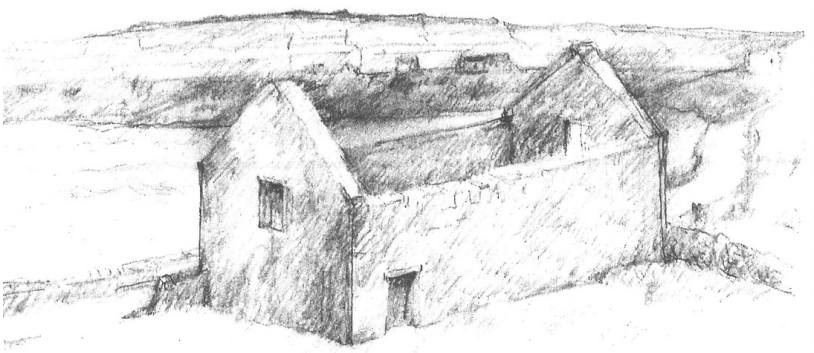
愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。ところが、夜中になって、「そら花婿だ。迎えに出よ。」と叫ぶ声がした。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。「油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。」しかし、賢い娘たちは答えて言った。「いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよ

りも店に行って、自分のをお買いなさい。」そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。そのあとで、ほかの娘たちも来て、「ご主人さま。ご主人さま。あけてください。」と言った。しかし、彼は答えて、「確かなところ、私はあなたがたを知りません。」と言った。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。

（マタイの福音書25章3～13節）

この油は、イエス様を信じた者に恵みとして与えられる神の御霊、聖霊を指します。このたとえから信じる者がわきまえておかなければならないことは、戸が閉められてからではいくら「ご主人様開けてください」と叫んでも遅いということです。ですから信じる私たちはイエス様のご再臨がいつあっても、今日あっても、明日あってもよいように、信じる者に与えてくださった聖霊の油を絶やすことなく、しっかりと霊の目を覚まして「主よ、来てください」とご再臨を日々待ち望みながら祈りつつ、心の備えをしていることが大切であると思う次第です。

三　主は彼の後ろの戸を閉ざされた



アラン諸島
アイルランド

四　ほんとうの満足とは

神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。

（コリント人への手紙第二9章8節）

今日はこの聖書の箇所の中から、「満ち足りる」、満足する、ということについてごいっしょに考えてみたいと思います。

満足するとは

もし私たちが何かの集いで「あなたは今満足していますか」というアンケート調査をしたとしたら、「はい」と答えられる人は果たしてどれほどいるでしょうか。

改めて満足するとはどういうことなのか考えますと、それは自分のこの世的な願望が満たされることであると言うことができると思います。ところが人間の願望は止まるところ

がなく、次から次と移り変わり、あるいは膨らむものであります。ですから一つの願望を満たしたと思っても、すぐにもっと大きな願望へと膨らんだり、あるいは、まったく別の願望が出てきたりします。たとえば飢え死しそうな終戦直後の時代には、どんな食べ物でもおなかを満たせばそれで満足だったのですが、事情が少し良くなると満腹するだけでは満足できなくなり、おいしいものが食べたいと思うようになります。聖書にも同じようなことが書かれています。

また彼らのうちに混じってきていた者が、激しい欲望にかられ、そのうえ、イスラエル人もまた大声で泣いて、言った。「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、たまねぎ、にんにくも。だが今や、私たちののどは干からびてしまった。何もなくて、このマナを見るだけだ。」

（民数記11章4～6節）

これは、イスラエルの民が長い間奴隷的な生活を強いられていたエジプトから、神様に導かれモーセに率いられて脱出したときの話であります。彼らはエジプトを出た後、目的地のカナンに着くまで四十年の間、神様に導かれるままにシナイの荒れ地を旅しました。

その間彼らは渇きと飢えに苦しめられます。そこでイエラエル人を代表してモーセが神様に祈ると、神様は祈りに答えて毎夜イスラエル人が必要な分だけのマナという食べ物を天から降らせてくださいました。彼らははじめは飢えていたので、おいしい、おいしいと食べていましたが、これが毎日続くとマナでは満足できなくなり、エジプトでは魚がただで食べられたとか、エジプトの肉や野菜が食べたい、こんなことならエジプトで奴隷になっていたほうがましだ、など不平をこぼしはじめたのです。これは私たち人間の欲望の状態をよく現わしています。

欲望の追求が招くもの

私たちの願望には食欲のような本能的なものから、道徳的、倫理的な願望までさまざまなものがあります。また人それぞれに願望の種類も程度も異なります。ですから結局人間はいつも満足できない、いつも満たされない状態に置かれているといってもよいでしょう。そのような私たちですから冒頭の聖書にある「常にすべてのことに満足する」というようなことはとても考えられないことです。ある人は「満足できないのはあたり前ではないか。人間が満足してしまったら進歩がない。願望、欲望を満たしたいという人間の思いが科学

を進歩させ、現在のような文明を築き上げることができたのではないか」と反論されるかも知れません。しかし、ここで私たちのこのような飽くなき欲望の追求が、果たして人間をほんとうに幸せにするのだろうかと静まって考えると、幸せにするどころか逆に人間を破滅に導くものであることに気づくのであります。

その良い例として体外受精を取り上げてみましょう。体外受精は不妊症の究極的な治療法として、今や広く行なわれるようになりました。受精というのは女性の卵子細胞と男性の精子細胞が合体することによって、まったく新しいいのちの細胞である受精細胞が誕生するという、まことに神秘的な現象を言います。しかし、人間の知恵はこの現象を体外で実現させることに成功し、これを不妊症の治療に利用したのです。わが国では安易に体外受精術が行なわれるのを防ぐために、実施にあたっては、ほかの方法では妊娠が望めないことが確認されていること、夫婦間に限ること、受精後すべての受精卵はただちに妻の胎内に戻すことなどの倫理的なルールに従うことが求められています。これは他人の精子を使ったり、受精卵を妻以外の女性の胎内に戻して子を産ませたり、余った受精卵を実験に使ったりすることを防ぐためであります。しかし、もうすでに問題が起こっています。というのは体外受精では妊娠の成功率を高めるために、通常一度に三個ないし四個の受精卵

を胎内に戻すのですが、戻した受精卵がすべて順調に育つと三つ子、四つ子が産まれてしまうのです。けれども三つ子や四つ子が胎内で育っていることがわかった親の中には、それまで何としてでも子どもが欲しいと言っていたにもかかわらず、そんなに多くの子はいらないから、あるいは経済的に育てられないから、ひとりを残して中絶して欲しいと希望する親がたいへん多いというのです。自分の願望を満たすためには人間のいのち、それも自分の子どものいのちを犠牲にしてもかまわないという恐ろしい自己中心な考え、これが生まれながらの人間の罪の姿なのであります。

むさぼりの罪

このように人間の肉の欲求は止まることを知りません。そして聖書ではこの人間の飽くことのない満足の追求を、むさぼりの罪、貪欲の罪と言っています。イエス様は次のようにおっしゃいました。

内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。

（マルコの福音書7章21～23節）

神様がモーセをとおしてイスラエル人、ひいては私たちに与えられた十戒の中に、

すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。

（申命記5章21節）

という戒めがあります。自分が持っていないものを人が持っていると欲しくなる、これが人間のむさぼりの罪、貪欲の罪であります。このむさぼりや貪欲が、盗み、姦淫、不品行、殺人、欺きなどの罪を引き起こす原因になるという点では、むさぼりや貪欲は罪の根源とも言えるのです。

神から与えられる満足

このように、満足を求めながらも満たされないで平安や喜びをなくし、不平、不満をつぶやきながら日々を過ごしがちな私たちに対して、神様は「あなたは常にすべてのことに満ち足りることができる」とおっしゃっているのです。そして事実、このような満足を体験した人のことが聖書に書かれています。それはパウロであります。彼は次のように言っています。

乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。

（ピリピ人への手紙4章11～12節）

私たちはパウロが言うような「どんな境遇にあっても満ち足りる」というようなことはとてもできないと考えてしまいます。しかし、パウロは「できる」と言っています。ではその秘訣はどこにあるのでしょうか。それは冒頭にお読みした聖書にありますように神様が満ち足らせてくださるというところにあります。パウロはこれについて、

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。

（ピリピ人への手紙4章19節）

と説明しています。これが秘訣であります。神様が御子イエス様にあるご自身の栄光の富をもって満たしてくださるからこそ、私たちはどんな境遇の中でも満ち足りることができるのであります。ではイエス・キリストにある栄光の富とは何でしょうか。それは私たち

の肉を満足させる富ではなく、イエス様を信じる者に恵みとして与えられる霊的な富であります。

霊的な富

では霊的な富とはどのような富なのでありましょうか。

その一つは信じる者にイエス様が与えてくださった永遠のいのち、よみがえりのいのちであります。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

（ヨハネの福音書10章28節）

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。

（ヨハネの福音書11章25～26節）

とあるように、イエス様を信じる者はイエス様の永遠のいのち、よみがえりのいのちというすばらしい富をいただいているので霊が満ち足りるのであります。

またもう一つの霊的な富は、信じる者の心の中に住んでくださるイエス様の御霊であります。これについてパウロはローマの信者に宛てた手紙の中で、

もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。

（ローマ人への手紙8章9～10節）

と言っており、またエペソの信者に宛てた手紙には、

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。

（エペソ人への手紙3章16～17節）

とあるように、神様は霊的な富としてイエス様の御霊を信じる者の中に住まわせてくださり、その御霊が内なる人とも呼ばれている、その人の中に与えられた霊を強め、導いてくださるので、たとえ大きな試練の中にあっても霊は満ち足りるのであります。その霊的な

満足がパウロに、

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

（コリント人への手紙第二4章7節）

と言わしめているのであります。

さらにもう一つの霊的な富は、神様やイエス様のみことばであります。詩篇一一九篇の作者は、

あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

（詩篇119篇103節）

あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇119篇72節）

と神様のみことばを味わって満ち足り、この世の富に勝る富と感謝しています。私たちもイエス様を信じる前に聖書を頭で読んでいたときにはまったくわからなかったみことばの

深い意味を、信じてからは頭ではなく生まれ変わった霊がみことばを食べて味わい知ることができたので満足するのです。

しかし、どうして神様は私たちにそのような恵みを与えてくださるのでしょうか。それは神様がご自分の御子を私たちのために身代わりに死に渡されるほど、自分の欲を満たすことしか考えないような自己中心な私たちを愛してくださっているからです。パウロはこう言っています。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ人への手紙8章32節）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ人への手紙8章28節）

ここに「神のご計画に従って召された人」とありますが、これはどういうことなのでしょう。聖書の神様は目には見えませんが永遠に存在され、私たち人間をご自分に似たも

のとして造ってくださり、私たちと親しく交わろうと思ってくださる方であります。この神様は完全な義と愛の方であります。それに対して私たちは神様に背いたアダムの遺伝子を受け継ぐ子孫であります。ですから神様に背いて自分の欲を満たすために神様の戒めを破ってしまったアダムと同じく、私たちも生まれつき自分の欲を満たすことしか考えないような罪に汚れた者です。しかし、愛とあわれみに富みたもう神様はこのような人間をもお見捨てにならず、罪から救い出そうとお考えになりました。そのお考えとは私たちの罪を神の御子イエス様に負わせ、私たちの身代わりとして十字架の上で罰してくださるという、私たちにはとうてい考えも及ばないものでありました。完全な義にして愛そのものであられる神様はこのような想像を絶する方法によって私たちの罪をイエス様によって罰し、そして私たちの罪を完全に赦してくださったのであります。私たちがこの神の御子イエス様の十字架の死がほかならぬ自分の罪のためであったことを知って心から悔い改めたときに、神様は御子イエス様に免じて私たちの霊を聖め、背き離れていた私たちとご自分との親しい霊的な交わりを回復してくださるのであります。このように完全な赦しを無代価でいただけることを知り、心から罪を悔いて感謝し、これからは神様に従って歩んでいきたいと心から願うようになったならば、その人は「神のご計画に従って召された人」なので

あります。

神に召された者の満足

さて神様に召された者はそれまでの古い自分がイエス様によって変えられて生き方が一新します。今までの古い自分はさきほどから申しているように、自分の肉の願望、欲望を満たすことしか考えることはできませんでしたけれども、神様に召されて新しく生れ変わってからは肉の富に満たされることを求めるのではなく、霊の富に満たされることを望むようになります。これについてパウロは自分自身の心の変化を次のように言っています。

私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ人への手紙3章7～8節）

パウロとまではいかなくても、私たちも信じる前と後では自分の中にこれと似たような変化が生じたことを体験するのではないでしょうか。私自身の体験でも少なくともイエス

様を信じる前と後ではこの世のものに対する価値観が大きく変わって、この世的には価値のあると思われるものが、信じてからは空しく色褪せて見えるようになったのは確かであります。もちろんイエス様によって生まれ変わった後も私たちは誘惑に弱い肉のからだを着ていますから、この世のものに心を引かれることはありますけれども、そういうときにも、もはやそのようなものでは決して満足できない自分に気づいてイエス様から心が離れたことを悔い改め、ふたたびまことの満足を与えてくださるイエス様に立ち帰ることができるのです。

主に喜ばれることによる満足

さらに生まれ変わった霊は神様やイエス様に喜んでいただければ満足します。それはちょうど自分を愛してくれる親を喜ばせることが子どもにとっての喜びであるのと同じであります。パウロが、

私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

（コリント人への手紙第二5章9節）

と言っているとおりであります。ではどうしたら主は喜ばれるのでしょうか。肉の親は子

どもが親の言いつけにすなおに従うことを喜びますが、主も私たちがいつも神様の御前にへりくだって「主よ。御前におります。どうかみこころをお示しください」と主を仰ぐことを喜ばれます。そして主が喜んでくだされば私たちの霊は満足するのです。

主イエスから与えられるまことの富

このようにイエス様を信じる私たちの霊が満ち足りていれば、たとえこの世においては貧しくても、不治の病気に罹っていても、孤独であっても、ほんとうに満ち足りることができます。パウロはこれを次のように言い表わしています。

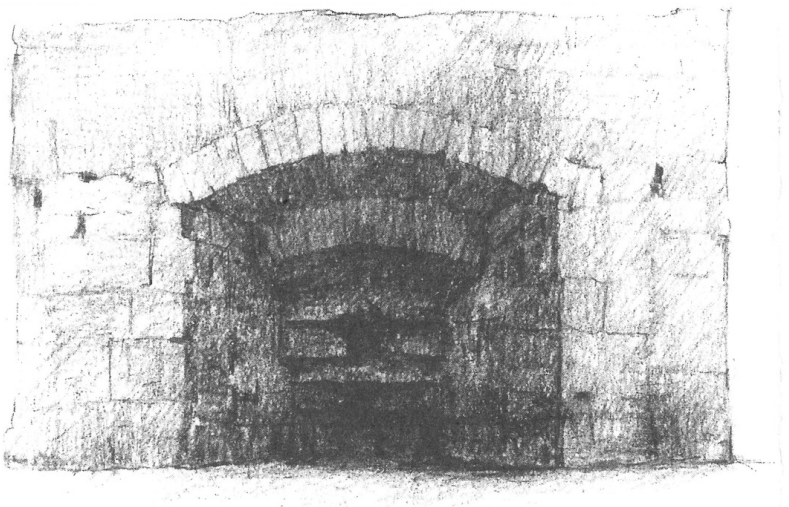
人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであっても、殺されず、悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。

（コリント人への手紙第二6章9～10節）

「貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っている」などという逆説的なことは、常識では考えられないことですが、イエス様が私たち

の中に栄光の富として住んでくださっていますから、私たちはそのイエス様を人に分け与えることによって、その人をもイエス様という富で富ませることができるのです。私たちはこの世のものは何も持っていないようでもイエス様のすべての富を持っています。ですから信じる者のこの世の状態がどんなであっても、いつも喜んで満ち足りていることができるのです。

どうか、まだイエス様をご存じない方はこの世の富を追求して、結局それが空しいとわかって失望して終わってしまうのではなく、イエス様からいつまでも続くまことの富をいただいて、ほんとうの満足を得てくださるように心からお祈りいたします。また、すでにイエス様を信じている私たちも、常にすべてのことに満ち足らせてくださるイエス様に従って御霊によって満たされ、さらに深い喜びと平安と希望と感謝に満ち足りた日々を過ごすことができるように心から祈りたいと思います。



石灰を作る建物（17世紀）の一部
アイルランド・ゴルウェイ市

五　代価を払って買い取られた者

あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（コリント人への手紙第一　6章20節）

今日はこの聖書のみことばから、「代価を払って買い取られた者」ということについてごいっしょに考えてみたいと思います。

昔は負債、すなわち借金を返せない者は牢獄に入れられたり、自分の身を売らなければなりませんでした。しかし、もしだれかがその人の身の代金を払って買い戻してくれれば、その人はそこから自由になることができたのです。旧約聖書には次のようなことが記されています。

彼が身を売ったあとでも、彼には買い戻される権利がある。彼の兄弟のひとりが彼を買い戻すことができる。あるいは、彼のおじとか、おじの息子が買い戻すこと

ができる。あるいは、彼の一族の近親者のひとりが買い戻すことができる。

（レビ記25章48～49節）

神に対する負債

このように、一般に負債といえば私たちは人間に対する負債のことだけを考えますが、そのような負債がすべてではありません。実は私たちは神様に対して大きな負債があることに気づいていません。神様に対する負債とは神様に対する背きの罪という負債であり、その負債は私たちをご自分の子どものように愛してくださる神様に従わずに自分の頭で考え出した偶像に仕えること、また神様ではなく自分の思いに従うことなのであります。私たち人間はみな生れながらにこのような性質を持っていますから、神様に対する罪の負債は、あるかぎられた一部の人だけにあるのではなく、私たちすべての人間にあるのです。では私たちは自分の力やお金で神様に対する負債を返済できるでしょうか。悲しいことにそれは不可能なのです。なぜならば次のみことばに記されているように神様に対する負債はたいへんに大きく、その身の代金は余りにも高く、とうてい人間の力では払うことができないからです。

人は自分の兄弟をも買い戻すことはできない。自分の身のしろ金を神に払うことはできない。……たましいの贖いしろは、高価であり、永久にあきらめなくてはならない。

（詩篇49篇7～8節）

神様に対する罪の負債がどうして人間が払いきれないほど大きく、高価なのでしょうか。それは罪の負債は私たち一人ひとりが最初の人間アダムから引き継いでいるたいへんに根深いものだからです。

では私たちがこの負債を返済できないままに放って置いたらどうなるでしょうか。神様は負債を返すことができない者には、その罰として御子イエス様によって最後の審判の日に永遠の滅びという刑を執行されます。イエス様が次のようにおっしゃっているとおりです。

父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。

（ヨハネの福音書5章27～29節）

ここに「墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時」とありますが、これは死者のからだのよみがえりの時であり、人は死んだ瞬間に霊とからだは分離して生前に善を行なった者の霊は直ちに天国に入り、悪を行なった者の霊は黄泉（よみ）の国でさばきを待つと聖書に記されているのです。ここで「善を行なう」というのは神様に負債を返済することであり、また「悪を行なう」とは神様に負債を返さないことを指します。

神ご自身が代価を払ってくださる

それでは「自分の身の代金を神に払うことができない」と記されている人間はみな、永遠の滅びの刑を受けなければならないのでしょうか。そうではないのです。驚くべきことに神様は冒頭のみことばにあるように、罪の身の代金をご自身で払って私たちを買い取ってくださったのであります。詩篇の作者は次のように言っております。

彼らは羊のようによみに定められ、死が彼らの羊飼いとなる。朝は、直ぐな者が彼らを支配する。彼らのかたちはなくなり、よみがその住む所となる。しかし神は私のたましいをよみの手から買い戻される。神が私を受け入れてくださるからだ。

（詩篇49篇14～15節）

私たちは自分で犠牲を払ってまで他人の負債を返済するというようなことはなかなかできない、そのような愛のない者です。しかし、私たち人間をはじめ天地万物を創造なさり、主権者として天地を支配しておられる神様は、ご自分に背いてわがまま勝手なことをしている愚かな私たちをなお見捨てずに愛してくださり、ご自身で身の代金を支払ってまでして私たちを滅びから買い戻してくださったのです。では神様はどのような代価を、どんな身の代金を支払って買い戻してくださったのでしょうか。なんとそれは神のひとり子イエス様のいのちという代価だったのであります。神様は御子イエス様のいのちによって私たちを罪から贖い出してくださったのです。このようなことは人間の常識をはるかに越えているために私たちにはとうてい理解することができません。しかし、神様が支払ってくださったこの大きな犠牲によって、私たちは人間が神様に犯した罪は神のひとり子のいのちを代価とするほど大きなもの、私たち人間の罪の価は御子イエスのいのちの価と引き替えにするほど大きなものであることを知るのです。

律法の役割

神様はイスラエルの民をとおして人間にご自分の命令、戒めとして律法をお与えになりました。人間がもしこの律法を百パーセント守り行なうことができれば、もしこの律法に生涯にわたって一度の違反もなく完全に従うことができれば、神様は人間を正しい者、罪がない者と認めてくださいます。しかし、悲しいことに人間がいくら神様の律法に従いたいと努力しても、完全に従うことは決してできないのです。たとえば人間は自分の意思の力で少しでも人を憎んだり、さげすんだり、またうらやんだりする思いを起こさないように自分を押さえ続けることができるでしょうか。またこの世の富や権力や栄誉を求める思いを自分の意思の力によってなくすことができるでしょうか。また偶像の神とまことの神様とをはじめからしっかり見分けて、まことの神様だけに仕え続けることができるでしょうか。あるいは自分を愛するのとまったく同じように人を愛し続けることができるでしょうか。これらのことが完全にできればその人は神様の律法を守り行なう正しい人であります。イエス様は神様の律法の中心は次の二つであるとおっしゃいました。

彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。「先

生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

（マタイの福音書22章35～40節）

いったい人間は神様から与えられたこの戒めを完全に守り通すことができるでしょうか。できません。なぜなら私たちは悲しいことにどうしても自分の意志の力では自分中心の思いを捨てることができないからです。ですからパウロも次のように言っています。

肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。

（ローマ人への手紙8章7節）

では、なぜ神様は人間が守ることのできない律法をお与えになったのでしょうか。それはすべての人間が神様に対する生まれながらの罪人であることを律法によって思い知るためであり、人が神様の前に正しくあろうと思っても正しくあり得ない者であることを思い

知るためであります。

贖いの代価であるイエス・キリスト

イエス様はこのあわれな、生まれながらの罪人である私たち人間一人ひとりの罪を身代わりに負って、律法ののろいをご自分の身に引き受けて、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。パウロはガラテヤ人への手紙の中で次のように言っています。

というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる。」のだからです。しかし律法は、「信仰による。」のではありません。「律法を行なう者はこの律法によって生きる。」のです。キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれたものである。」と書いてあるからです。

（ガラテヤ人への手紙3章10～13節）

しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を贖い出すためで、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。

（ガラテヤ人への手紙4章4～5節）

しかし、なぜ神様はこのような尊い高価な贖い代を払ってまでも私たちを買い取ってくださったのでしょうか。それは神様がご自分に背き続けるような罪深い私たちをなおも心から深く愛してくださっているからです。

私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

（ローマ人への手紙5章8節）

ではどうして、そのようにしてまで私たち人間を愛してくださるのでしょうか。それは神様が私たち人間をご自分と交わるようにご自分に似るものとして、いのちの息、すなわち神様の霊を吹き入れて造られた特別な被造物だからであります。私たち人間以外にそのようにして造られた被造物はほかにありません。ですから神様はもし私たちが自分の罪を知って心から悔い改めてご自分の前にへりくだれば、喜んで愛する御子イエス様のいのち

を贖い代として私たちの罪の負債を買い取ってくださるのです。ペテロはペテロの手紙第一の中で次のように言っています。

あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

（ペテロの手紙第一 1章18～19節）

完全に正しく聖なる神様がご自身の正しさ、聖さを曲げずに、私たち人間の罪の負債を取り除くための唯一の方法は、愛するご自分のひとり子イエス様に身代わりに人間の罪を負わせるというものでした。ローマ人への手紙の中でパウロは次のように言っています。

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。

（ローマ人への手紙3章25節）

なだめの供え物とは何でしょうか。ユダヤでは神様と人間との間に立って神様に仕えていた祭司が、罪の贖いのために罪を犯すごとに動物をほふって神様にささげておりました。しかし動物の血では聖めることができない人間の罪を、イエス様は十字架の上で流された

ご自分の尊い血によって完全に聖めてくださったのであります。

すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

（ヘブル人への手紙10章11～14節）

ここに記されているようにイエス様の血による罪の贖いは十字架の上で二千年前にただ一度だけなされましたが、この一度かぎりの十字架による罪の贖いは過去に遡ってはアダムのときから、将来は最後の審判の日までにわたって有効なのであります。ですからイエス様がこの世界においでになる前に世を去った人々やイエス様を知る機会がないまま亡くなった人々でも、自分は何事も自分自身を第一にしか考えられないような自分勝手な者であることを認めて、悔い改めて神様の前にへりくだって心から赦しを求めた者はすべて、神様が御子イエス様のいのちという高価な代価を支払ってくださって罪から贖い出してくださっているのです。

このようにイエス様の贖いのみわざは完全であります。したがってイエス様に贖われた者の罪は完全に精算されており、罪の奴隷から完全に解放されて自由になっているのです。それは神様の次のような約束に基づいているからであります。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

（イザヤ書43章25節）

神に買い取られた者のなすべきこと

では私たち人間は、自分のためにこのように高価な代価を払ってくださった神様の御前にどのような態度を取ればよいのでしょうか。預言者ミカは次のように言っています。

私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。

（ミカ書6章6～7節）

これは神様はそのようなささげものを求めてはおられないという反語であります。神様が私たちに求めておられるものは、ダビデ王が言っているように悔い砕かれた心のささげものなのであります。

たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

（詩篇51篇16～17節）

このように神様は私たちがただ神様の御前に悔い砕かれた心をもって、神様が愛する御子イエス様の尊いいのちの代価を払って罪から贖い出してださったことを心から受け入れて感謝することだけを求めておられるのです。

神に買い取られた者の生き方

では神様に代価を支払って買い取っていただいた者はそれから先どのように生きたらよいのでしょうか。それは冒頭のみことばの後半にあるように「自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい」というように生きることであります。なぜなら、イエス様のいの

ちの代価を払って買い取られた者のからだは、もはや自分のものではなく神様の御霊がお住みになる宮とされているからです。パウロはコリントの信者に宛てた手紙で次のように言っています。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。

（コリント人への手紙第一6章19節）

またパウロはガラテヤの信者に宛てた手紙の中で次のようにも言っています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

（ガラテヤ人への手紙2章20節）

神様が神の御子イエス様のいのちという、私たち人間の考えをはるかに超えた高価な代価を支払って私たちを買い取ってくださったのは、買い取った者を用いて神様がご栄光を現わされるためであります。そして神様のご栄光を現わすこと、それが神様に買い取られた者が生きる目的になるのです。ですから贖われた者は神様に用いられる器としての自覚をもって生きているか、あるいは救われた後もあいかわらずこの世を、自分の思いを第一

として生きているかどうか、よくよく自分の生き方を吟味してみる必要があります。もし後者であればふたたびこの世の奴隷に舞い戻ってしまっていることになります。パウロは次のように警告しています。

あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となってはいけません。兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態で、神の御前にいなさい。

（コリント人への手紙第一7章23～24節）

この警告は神様に罪の代価を払っていただいて主のしもべとされた者は、あれこれ自分で考えて行動するのではなく、いつも神様の御前に静まって「主よ。私はここにおります。みこころをお示しください。私はみこころに従います」という思いで主を仰ぐことが大切であると言っているのです。

イエス様を信じる方の中にも、主のみこころを求めずに、ただ人間的な基準による善き行ない、奉仕がキリスト者としてなすべきことであると誤解している方がいます。しかし、神様はそのようなものによってご自身のご栄光を現わすことはなさいません。なぜならそのような善き行ないは、その人の心に高ぶりの思いを起こすからであります。ヤコブは手紙の中で次のように言っています。

神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。

（ヤコブの手紙4章6節）

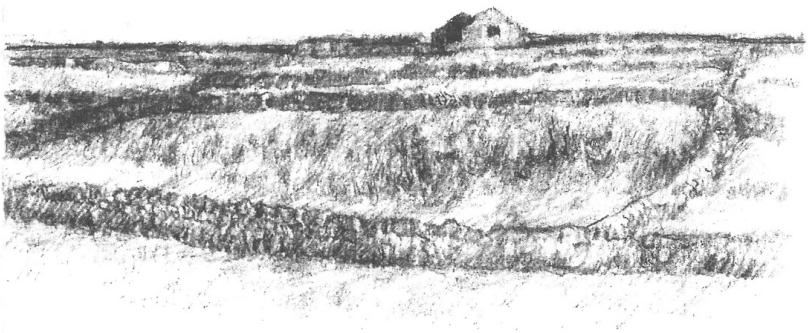
このように神様は心が砕かれ、ご自分の前にへりくだった者を祝福してくださり、その者の中に住んでくださっている御霊の働きによって、ご自身のご栄光をお現わしになります。そのために私たちは、

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

（ヨハネの福音書15章4～5節）

とイエス様がおっしゃっているように、自分では神様がご栄光を現わされるような御霊の実を実らせることは何一つできない者であることをわきまえて、このような信仰の薄い者をとおしても主イエス様ご自身がご栄光を現わしてくださるように祈りつつ、日々の歩み

を続けることがもっとも大切なのではないでしょうか。



アラン諸島
アイルランド

六　キリスト者の良き行ないとは

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

（エペソ人への手紙2章10節）

今日は、パウロがエペソの信者に宛てた手紙の一節から、キリスト者の良き行ないとは何かという問題についてごいっしょに考えてみたいと思います。というのは世の中の人も、またキリスト者自身もキリスト者の良き行ないについて誤解をしていることがあるからです。

信仰に良き行ないが伴わぬなら、その信仰は死んだもの

パウロはここでキリスト者は神様のみこころに従って、良き行ないをするために神の御

子イエス様にあって造られた神様の作品であり、その良き行ないも神様があらかじめ準備してくださっていると言っています。この言葉にはキリスト者の良き行ないとはどのようなものであるべきかがよく言い表されております。信仰と行ないとの関係についてはヤコブが当時のキリスト者に宛てた手紙に次のように書いています。

私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもことと欠いているようなときに、あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。

（ヤコブの手紙2章14～17節）

ここでヤコブは行ないが伴わない信仰は死んだ信仰であると言っていますが、しかし、私たちはうっかりするとこれを目に見える良き行ないをすることが正しい信仰であるというように、思い違いをしてしまう恐れがあるので、このような誤解をしないように気をつ

けなければなりません。なぜならパウロはガラテヤの信者に宛てた手紙の中で言っているように、神様は私たちの行ないによっては私たちを義とお認めにならないからです。

人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもいないからです。

（ガラテヤ人への手紙2章16節）

律法とは神様が人間にお与えになった戒めです。それなのに、どうして神様は人間が律法を行なうことによって義と認めてくださらないのでしょうか。それは人間は自分の力でいくら律法を正しく守り行なおうと努力しても、外面的、形式的な守り方、偽善的な行ないしかできず、どうしても神様が求めておられるように律法を正しく実行することができないからです。イエス様は形式的、偽善的な律法の守り方をしている律法学者やパリサイ人たちに次のようにおっしゃいました。

……パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、

手をよく洗わないでは食事をせず、また、市場から帰ったときには、からだをきよめてからでないと食事をしない。まだこのほかにも、杯、水差し、銅器を洗うことなど、堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある。……パリサイ人と律法学者たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか。」イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」

（マルコの福音書7章3～8節）

忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。

（マタイの福音書23章25～26節）

これはパリサイ人にかぎりません。よくよく考えると私たちキリスト者の良き行ないもそのようなもので、とかく形式的、外面的であることが多く、また良き行ないをしたときの自分の心の中をのぞくと、良き行ないは人のためではなく自分が満足するためのものであることを思い知らされます。人の心を見透かされるイエス様は、そのような良き行ないは偽善的な行ないであって、それでは神様が私たちを義とお認めにならないのはとうぜんだとおっしゃっているのです。

信仰における行ないの土台

ではどうしたら人間は神様が喜ばれるような良き行ないをすることができるようになるのでしょうか。それにはイエス様を信じ受け入れたうえで、そのイエス様という土台に立つということが基本であります。というのは、まことの良き行ないはイエス様という土台の上に立ってはじめて可能となるからです。パウロはコリントの信者に宛てた手紙の中で次のように言っています。

与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについ

てはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

（コリント人への手紙第一3章10～11節）

パウロは「神様の恵みによって自分はイエス様という土台を据えることができ、その上に信仰生活という家を建てている。そして信仰者の生活の土台はイエス様以外には有り得ない」と言っているのです。私たちキリスト者がもし日曜の礼拝のときだけ、あるいは聖書を読むときだけ、祈りのときだけ、イエス様を土台とするようでは、ほんとうにイエス様を土台としている信仰の生活とは言えません。日々の生活の中においていつもイエス様を土台として物事を考え、行動することがキリスト者に求められる信仰生活なのであります。私自身についても、いつも霊の目を覚ましていないと日常生活の中でイエス様を土台としていることをつい忘れ、自分を土台として自分の思いで判断したり行動したりしてしまいます。ですからパウロはこの手紙で私たちキリスト者の日々の生活をイエス様という土台の上に築かなければならないと言っているのです。キリスト者の毎日の生活は、会社員、教師、弁護士、医者、音楽家、画家、建築家、学生、主婦など、それぞれの職業、立

場によって異なりますがしかし、その生活がこの世の人々のような会社員、教師、弁護士、医者、音楽家、画家、建築家、学生、主婦の生活であっては、イエス様の土台の上に立った生活とは言えません。キリスト者とはイエス・キリストのものという意味であります。したがってイエス様のものとされた私たちは、それぞれイエス様の会社員、イエス様の教師、イエス様の弁護士、イエス様の医者、イエス様の音楽家、イエス様の画家、イエス様の建築家、イエス様の学生、イエス様の主婦なのであります。ですから職業や身分が何であれ、また男であれ、女であれ、自分がイエス様のものとされていることをいつもはっきり意識してイエス様を仰いでいれば、おのずと「どうか私が神様の作品にふさわしいように、イエス様の土台の上に立つ行ないを、日々の生活の中で実行できるようにしてください」とイエス様に熱心に祈り求めることができるのではないでしょうか。

信仰における良き行ないの原動力

ではイエス様の土台に立つ良き行ないは具体的にどうしたら得られるでしょうか。イエス様の土台に立つ良き行ないの原動力は何なのでしょうか。

一、イエス様の土台に立つ良き行ないは御霊が行なわせてくださる

まずイエス様の土台に立つ良き行ないは御霊によって私たちに示され、御霊によって導かれるものであることを知る必要があります。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

（ピリピ人への手紙2章13節）

キリスト者の良き行ないは、自分の考えで行なうものではなく、神様の御霊が私たちの霊に働いてみこころを示してくださり、私たちの霊にみこころに従う力を与えてくださることによってなされるとパウロは言っているのです。では私たちはどのようにして神様のみこころを知り、また神様からの力をいただけるのでしょうか。それには次の詩篇の作者のように祈ることであります。

朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

（詩篇143篇8節）

このようにへりくだってイエス様を仰いで祈るとき、イエス様は私たちに行なうべき道を示してくださり、それを行なう力も与えてくださいます。

二、イエス様の土台に立つ良き行ないは、みことばの働きによってなされる

またイエス様の土台に立つ良き行ないは、聖書のみことばが私たちの中で働いてくださることによって行なうことができることを知る必要があります。パウロは次のように言っています。

あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。

（テサロニケ人への手紙第一　2章13節）

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

（ヘブル人への手紙4章12節）

聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

（テモテへの手紙第二3章16～17節）

「神の人」とは神様によって召し出され、みこころを宣べ伝えるために用いられる者であります。ここに記されているように聖書のみことばは、私たちキリスト者に対して神様がみこころを目に見える形で伝達してくださる大切な方法です。それだけでなく、みことばそのものが私たちに働いて良き行ないをさせてくださる力を持っているのです。ともすれば自分の判断で行動しがちな私たちですから、いつもみことばに頼って、自分のなすべきことは何かをみことばから示されるように祈りたいと思います。

キリスト者の行ないの特徴

またイエス様の土台に立つ良き行ないは、かならずしも手足を使うことによってなされるとはかぎりません。最近、私はふたりの主にある兄弟をとおして深くそのことを覚えさせられました。そのうちのおひとりであるY兄弟は、検診で思いもかけず手術不可能な重いがんが発見されました。しかし、そのことを医師から告げられてもまったく恐れることなく、喜んで天に召されたいという希望に満たされてイエス様にいつも感謝し、聖書のみことばを味わって喜び、病状がどんどん進行するにもかかわらず、顔はいつも平安と希望

に輝いておられました。そして召される前日まで喜んで兄弟姉妹方との交わりを持たれ、次の日に兄弟姉妹による聖歌の歌声に送られて天の御国に凱旋なさいました。闘病中のこのY兄弟の態度をとおして、まわりにいる私たちは、もし人がイエス様に信頼し切るならば、その人をイエス様はご自身のまったき平安で包んでくださり、少しも死を恐れることなく希望を持って天の御国に向かって旅立たせてくださる事実をこの目ではっきりと見ることができました。

もうおひとりのK兄弟は回復の見込みのない重症の肺繊維症にかかられ、やがて迎える死に臨んで最後のときの医学的処置について次のように担当医師に手紙を書かれたのです。

「延命について

回復の見込みのない延命処置は希望しません。（植物人間的な肉体維持は一切不要のこと）

私はイエス・キリストが私のためにこの世に生まれてくださり、苦しみを受け、そして死んでくださったことを信じます。また、イエス・キリストの苦しみと死と復活は、私が今迎えようとしている死から復活への道を約束してくださっていることを信じ、主である

神の定められた時に召されるのが最善であると思います。今まで何回となく死の縁をさまよいましたが、主が守ってくださり生かされてきました。その試練をとおし、私と妻はイエス様の時にかなった恵みをたびたび与えていただき、大いに喜ぶことができました。

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。

イザヤ書46章3、4節より

と聖書に書かれたように、私たちは大きな恵みをいただきながら、主の定められた時を待つことのできるのは、なんという幸せなことでしょう。

付記

コリント人への手紙第二5章1節、2節、7節、8節

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。私たちはいつも、心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいる

ほうがよいと思っています。」

この手紙は終末医療に対する医師への要望というよりは、はっきりとしたイエス・キリストの証しであります。延命治療を望まないと言う人は多くありますが、なぜ望まないか、その理由がこのようにはっきりと書かれたリビング・ウイル（生前遺書）を私は見たことがありません。この手紙を受け取った担当の医師や看護婦の方々は感動し、K兄弟の望みどおりに延命措置は講じられず、K兄弟は平安のうちに天に凱旋されました。

このように、たとえ病気で寝たきりになっても、イエス様の土台に立つ良き行ないは可能なのです。そしてこのふたりの兄弟の主にある良き行ないをとおして、イエス様ご自身がほめたたえられる結果となったのです。

前に申しましたように、良き行ないが自分の栄光を現わすためであったり、自分を誇るためのものであったりすれば、それはもはやキリスト者の良き行ないとは言えません。自分が光となって照り輝くのではなく、光はイエス様であって、私たちがイエス様を仰いで信頼し拠り頼むときに、イエス様の光が私たちをとおして良き行ないとなって輝き出るのであります。このようなキリスト者の行ないによってイエス様はご栄光を現わされるの

であります。このことをイエス様は次のようにおっしゃっています。

あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを枡の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

（マタイの福音書5章14～16節）

キリスト者は、イエス様によってこの世に遣わされた主のしもべです。その主な務めは、

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間には与えられていないからです。

（使徒の働き4章12節）

と宣べ伝えたペテロのようにイエス様を、イエス様の福音を宣べ伝えることです。キリスト者の一人ひとりがイエス様によってこの世に遣わされた者として、イエス様に仕える霊的な自覚をしっかりと持っていれば、おのずとその行動はイエス様の土台に立つ、神様の

みこころにかなう良き行ないとして現われるものであります。

また私たちキリスト者の霊は自分を誇ることや自分の行ないを誇ることが傲慢の罪であることを知っています。私たち自身には何一つ良きものはなく、良きものは神様から恵みとしていただいたものばかりであることも知っています。しかし、私たちキリスト者の着ている肉はともすれば自分を誇るという傲慢の罪を犯しやすいものであります。パウロは次のようにキリスト者に警告しています。

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。

（コリント人への手紙第一　4章7節）

だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。

（ガラテヤ人への手紙6章3～4節）

ほんとうにこのみことばのとおりであります。私たちは自分を誇っているかどうか、自分が傲慢になっているかどうか、心の中をいつも吟味している必要があります。

キリスト者は良き行ないを行なうために肉と戦う

今も申しましたようにキリスト者は、霊はイエス様を信じた瞬間に十字架の上で流された尊い血潮によって聖められますが、肉体はこの世にある間はなお不完全であるため悪の誘惑には弱い者です。パウロも次のように言っています。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

（ローマ人への手紙7章18節）

私たちキリスト者はみなそのような弱い、罪を犯しやすい肉を着て生きていますから、その肉に従っていたら、決してイエス様の土台に立つ行ないをすることはできません。そこでパウロは自分の肉を打ち叩いて霊に従わせようと言っています。

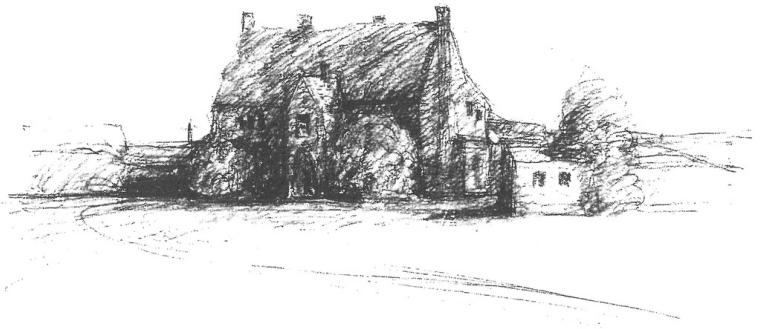
私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝え

ておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

（コリント人への手紙第一　9章27節）

しかし、肉を霊に従わせることは自分の力や意思ではできません。私たちキリスト者の中に住んでくださっている御霊の力に拠り頼むほかありません。ですから私たちがイエス様の土台に立つ良き行ないをするためには、霊が肉に打ち勝つことができるように熱心に御霊の助け、御霊の満たしを祈る必要があります。

神様がみこころによって私たちを造り変えてくださったのは、ただたんに私たちキリスト者が天国に入ることができるためだけではなく、冒頭のみことばのように、この世で神様の作品として良き行ないを行なうことをとおしてご自身のご栄光を現わされるためであります。しかも、神様は罪の性質を持って生まれた私たちを、神の作品として生まれ変わらせるために、御子イエス様を十字架にかけるという、たいへんな痛みを味わわれたのです。そのことを考えるとき、私たちはただ救われたことを喜ぶだけではなく、イエス様によって神の作品に生まれ変わらせていただいたことを心から感謝して、イエス様の土台に立ってみこころにかなう良き歩みができるように、さらに私たちの自我を砕いていただき、また霊を強めていただくように、日々イエス様に祈ってゆくことが大切であると思います。



南イングランドの農家

七　新しい歌を主に歌え

新しい歌を主に歌え。全地よ。主に歌え。主に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。

（詩篇96篇1～2節）

おめでとうございます。私がいつも新しい年のはじめにあたって申し上げることですが、私の言う「おめでとうございます」とは、この世でいう意味ではなく、一年過ぎて新しい年を迎えるたびにイエス様にお会いするときが一年縮まった、嬉しい、おめでたいという意味で申し上げています。ですからどうぞ兄弟姉妹もそういう観点で声を大きくしてお互いにおめでとうございますと挨拶していただきたいと思います。今日は、新しい年のはじめにあたって、このみことばからごいっしょに考えたいと思います。

私たち主にある兄弟姉妹は、礼拝や福音集会、あるいは家庭集会などでは、かならずごいっしょに主を賛美する歌を歌います。また聖書の詩篇の中にも主なる神様への賛美の歌

がたくさんあります。冒頭の詩篇もその一つであり、この詩篇の作者はここで私たちに対して、「さあ神様に新しい賛美の歌を歌おう」と呼びかけています。主なる神様を賛美する歌とは、言うまでもなく、神様の御名を、神様のご栄光を、ほめたたえる歌であり、それを歌う者は、すべて主なる神のしもべたち、あるいは神の民、主の子どもたちであります。その者たちが自分たちの主、父なる神をほめたたえ、また神様が自分たちにしてくださった恵みを感謝して、主に向かって「ハレルヤ」と歌うのが、主に向かって歌う歌であります。詩篇百十三篇もそのような賛美の詩であります。

ハレルヤ。主のしもべたちよ。ほめたたえよ。主の御名をほめたたえよ。今よりとこしえまで、主の御名はほめられよ。日の上る所から沈む所まで、主の御名がほめたたえられるように。主はすべての国々の上に高くいまし、その栄光は天の上にある。だれが、われらの神、主のようであろうか。主は高い御位に座し、身を低くして天と地をご覧になる。主は、弱い者をちりから起こし、貧しい人をあくたから引き上げ、彼らを、君主たちとともに、御民の君主たちとともに、王座に着かせられる。主は子を産まない女を、子をもって喜ぶ母として家に住まわせる。ハレルヤ。

（詩篇113篇）

この詩篇はハレルヤではじまりハレルヤで終わるすばらしい主なる神様への賛美の歌であります。

ほめたたえられるべき方、主なる神

この賛美の詩にあるように、神様の民、神様の子どもたちは、ほめたたえられるべきお方はどんな方であるかということをよく知っています。知っていると言いますと、私たちが自分の知恵や知識で知ったように受け取られてしまいがちですが、主なる神様を知るというのは、そのような知り方なのではありません。私たち人間の不完全な知恵や力では神様がどんな方かはまったくわかりません。それは自我のために、心の目、心の耳が神様に向かって閉ざされているからであります。

しかし、そのような者をも愛してくださる神様は、ご自身の大きな愛によって、恵みによって、私たちの閉ざされた心の目を、耳を開いてくださったので、私たちはその開かれた心で神様を知ることができるようになったのであります。今の詩篇の中には、神様が私たちに何をしてくださったかが歌われておりますが、神様は天よりも高い御座から身を低くして、弱い者、貧しい者、子を産めない悲しみの女などに代表される、すべての心の砕

かれた者をかえりみてくださり、あわれんでくださって、その者たちを悲しみの泥沼から引き上げて神様の家に住まわせてくださるとあります。私たちが知っている神様はこのような深い愛と恵みに富む神様なのであります。「だれが、われらの神、主のようであろうか」と詩篇の作者が賛美しているとおりであります。神様は預言者イザヤをとおして次のように仰せになっています。

あなたがたはわたしの証人、――主の御告げ。――わたしが選んだわたしのしもべである。これは、あなたがたが知って、わたしを信じ、わたしがその者であることを悟るためだ。わたしより先に造られた神はなく、わたしより後にもない。わたし、このわたしが、主であって、わたしのほかに救い主はいない。このわたしが、告げ、救い、聞かせたのだ。

（イザヤ書43章10～12節）

ここにありますように、神様が私たちを一方的にあわれんで心の目を開いてくださり、私たちの開かれた心に神様ご自身が告げ、聞かせてくださったので、私たちは神様がどんな方で、何をしてくださったかを知ることができたのであります。

イエス・キリストによって神を知る

神の御子イエス様がこの世に来てくださる前には、神様は預言者をとおしてみこころを示してくださいましたが、今、私たちはさらに幸いなことに、この神様を御子なるイエス様によって知ることができるのであります。イエス様は尊い神の御子でありながら、神様に背いてわがまま勝手に生きるという罪を犯していた私たちを、背きの罪のゆえの滅びに至る死から救い出すために、ご自分を無にして貧しい人としてこの世に来て十字架に架かって死んでくださり、よみがえってくださった、そのイエス様の中に私たちは父なる神様の深いみこころを見るからであります。イエス様ご自身が、

わたしを見た者は、父を見たのです。

（ヨハネの福音書14章9節）

とおっしゃっているとおりであります。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にま

で従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

（ピリピ人への手紙2章6～11節）

主イエスを知る喜び

このように、イエス様を信じて救われた私たちが開かれた霊の目で、神であるイエス様を見て、そのイエス様を主なる神としてほめたたえることができるのは何と幸せなことであり、何という喜びでしょうか。パウロはこの喜びを次のように表現しています。

私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ人への手紙3章8節）

パウロが言っているように、十字架に架かっていのちを捨てるほどに私たちを愛してくださり、今もなお愛し続けてくださっている救い主イエス様を知っていることのすばらしさは、この世のいかなる価値あるものにも勝るすばらしさなのであります。私たちはそのすばらしいイエス様を知っているから嬉しいのであります。

新しいたましいが救われるたびに主に歌う新しい歌

次に、主に向かって歌う新しい歌とはいったい何でありましょうか。それは私たちが、このような主のすばらしさにふれるたびに喜びと感謝に満ち、御霊に満たされて主にささげるほめ歌であります。たとえば私たちは自分の、あるいは主にある兄弟姉妹のご家族や友人、知人の方々が実に奇しい方法で導かれてイエス様を信じ、救いに与かられるのをこの目で何度も見ています。イエス様を信じた方々の証しを伺いますと、救いはお一人おひとりの上にイエス様が起こされた奇蹟であるとしか考えられません。しかし、私たちの目には奇蹟と写っても、イエス様は救おうとあらかじめお定めになった方々を、一人ひとり確実に、その方にもっともふさわしい方法で、もっともふさわしいときにお救いになるのであります。そして、そのようにして救われたお一人おひとりを見るたびに、私たちは主

イエス様に心から感謝し、心から新しい賛美の歌を歌うのであります。イエス様は次のようにおっしゃっています。

ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。

（ルカの福音書15章7節）

ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。

（ルカの福音書15章10節）

また詩篇の九十八篇には、

新しい歌を主に歌え。主は、奇しいわざをなさった。その右の御手と、その聖なる御腕とが、主に勝利をもたらしたのだ。主は御救いを知らしめ、その義を国々の前に現わされた。主はイスラエルの家への恵みと真実を覚えておられる。地の果て果てまでもが、みな、われらの神の救いを見ている。全地よ。主に喜び叫べ。大声で叫び、喜び歌い、ほめ歌を歌え。立琴に合わせて、主にほめ歌を歌え。立琴と歌の調べに合わせて。ラッパと角笛の音に合わせて、主である王の御前で喜び叫べ。海と、それに満ちているもの。世界と、その中に住むものよ。鳴りとどろけ。もろ

もろの川よ。手を打ち鳴らせ。山々も、こぞって主の御前で喜び歌え。
（詩篇98篇1～8節）

とあります。このようにして主なる神様が滅び行く迷えるたましいをお救いになる、その奇しいみわざに対して、主の勝利に対して、心から喜びのほめ歌を歌う、これが主に向かって歌う、新しい歌であります。

救われた者が信仰の試練のたびに主に歌う新しい歌

また、すでに救われた私たちも主イエス様に新しい歌を歌うときがあります。それはどういうときでしょうか。私たちは救われても、この世に置かれているしばらくの間はいろいろな試練があります。私たちの信仰は強くなく、そのため試練に会うと、つい悲しんだり、嘆いたりしてしまいます。そのようなときに、主は私たちを放っておかれるかというと、決してそのようなことはなさいません。そのたびに、私たちとともにいてくださる主は、慰め、励ましてくださり、あるときには背負ってくださり、弱った霊を、衰えた霊を御霊によって強めてくださいます。そのとき私たちは信仰の試練は主が私たちの信仰を成長させ、神の子どもにふさわしく、神の国を相続する者にふさわしく、育ててくださるた

めの主の愛、恵みであることを改めて覚えて、主に感謝し、新しい歌を主に向かって歌うのであります。パウロはキリスト者の試練の意味を次のように言っています。

私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかしてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

（ローマ人への手紙8章16～18節）

またペテロも次のように言っています。

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども

信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

（ペテロの手紙第一 1章6～9節）

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

（ペテロの手紙第一 5章10節）

このように主イエス様にしっかりと結びついて試練を通り抜けた体験をした者は、そのたびに御霊に満たされ、みことばの真実に感動し、心から主に向かって新しい歌を歌うのであります。

歴史は加速している

今朝の礼拝の中のお祈りにもありましたように、世の中はますます混沌の度を加えております。おそらくどなたも今年は去年よりもたいへんな世の中になると思っておられるのではないでしょうか。昨年の元日の某新聞の社説に、歴史は加速しているという次のよう

な記事がありました。「コンピューター革命が急速に進んだこの世紀末、歴史の加速はこの百年で何十倍にもなったと言ってもいいだろう。実際、最近の社会変動は加速が著しい。だれもがこのめまぐるしい変化に流され、おぼれ、戸惑っている。政治も国民も次から次に生じる事態に対応しきれないうちに、また状況は変わる。そして、半年先さえ、だれも的確には見通せない」、こういう記事でした。

昨年を振り返ってみるとまさにそのとおりの一年でした。人々は世界や日本の中で次々と目まぐるしく起こる、さまざまな混乱した政治的、経済的、社会的な事件をとおして、また急速に進んでいる地球環境の悪化の現象をとおして、歴史の進行が人間の力では止めることのできない急激な速度で、先の見通しも利かない、考えも及ばないどこかの終点に向かって、地球上の人々すべてを巻き込んでどんどん加速していることを肌で感じ取り、だれもが不安や恐れを感じているのではないでしょうか。けれどもイエス・キリストを信じる私たちは、主なる神様が世の人々に罪汚れに満ちたこの世の終わりが近づいているのを知るように、そして主イエス様のご再臨の時が近いのを知るようにと、歴史を加速しておられることを神ご自身のことばである聖書によって知っていますから不安も恐れもありません。ヨハネは黙示録の中で次のように書いています。

また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は幸いである。

（ヨハネの黙示録22章10～14節）

御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

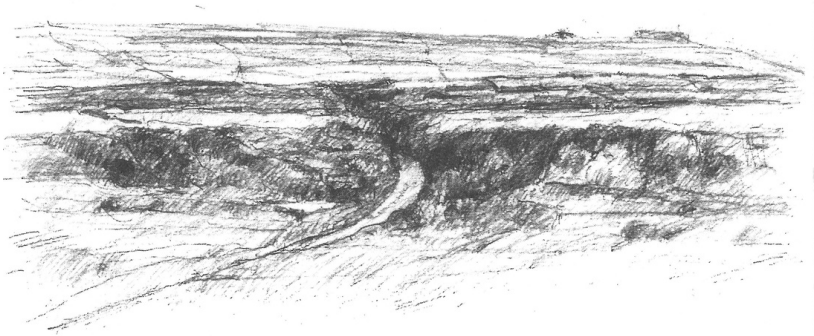
（ヨハネの黙示録22章17節）

このみことばを堅く信じている者には恐れも不安もありません。いよいよ主イエス様のご再臨が近づいているこの年にあたって、私たちイエス様を信じる者はその日の一日も早く来ることを心から待ち望みつつ、いのちの水そのものであるすばらしい主の御名を、恵

みを、まだイエス様を知らないで不安と恐れを持ちながら生きている私たちの身近にいる人々に、とくに家族や友人、知人に真剣に証しすることができるように、そしてますます多くの新しい歌を主に向かって歌うことができるように、ごいっしょに祈って行きたいと思います。最後にもう一か所聖書をお読みして終わりたいと思います。

正しい者たち。主にあって、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。まことに、主のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である。主は正義と公正を愛される。地は主の恵みに満ちている。

（詩篇33篇1～5節）



島の道
アラン諸島・アイルランド

八　イエスの御名において

御名を知る者はあなたに拠り頼みます。主よ。あなたはあなたを尋ね求める者をお見捨てになりませんでした。主にほめ歌を歌え、シオンに住まうその方に。国々の民にみわざを告げ知らせよ。

（詩篇9篇10～11節）

今日は詩篇九篇の中のこの箇所から、御名を知るとはどういうことなのか、そして御名を知った者はどのように生きたらよいのかということについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

主の御名を知るとは

聖書には御名という言葉がよく出てきます。たとえば預言者エレミヤは次のように言っています。

主よ。あなたに並ぶ者はありません。あなたは大いなる方。あなたの御名は、力ある大いなるものです。

（エレミヤ書10章6節）

はじめにお読みした詩篇はダビデが作ったものですが、このダビデとエレミヤの言葉から私たちはすぐに御名とは聖書の神様の御名を指しているということがわかります。そしてその神様はご自分の御名を知る者に対して次のように仰せになっています。

彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう。

（詩篇91篇14節）

ここで神様が「彼がわたしの名を知っている」とおっしゃっている、「知っている」ということは私たちの知識として知っているという意味ではありません。エレミヤが「あなたの御名は力ある大いなるもの」と言っているように、また預言者のイザヤがイザヤ書の中で、

見よ。主の御名が遠くから来る。

（イザヤ書30章27節）

と言っているように、ここでは主の御名とはたんなる名前ではなく主なる神ご自身を意味

しております。ですから主の御名を知るということは、たんに神様とは天地万物を創造され永遠に支配しておられる、力と恵みとあわれみに富みたもう大いなる生ける神であるということを知識として知るだけではなく、その神様は自分を子どものように愛して守ってくださっていることを心から感謝して、御前にへりくだり、まったき信頼をもって神様に自分をゆだねることまで含まれるのであります。そのように神様を知って御前にへりくだる者を、神様は高く上げよう、すなわち神様の子どもとしての身分を与え、さらにご自分のご栄光を現わすための器として大いに用いようと約束しておられるのです。

イエスの御名を知る

イエス様の御名を知ると言う場合も同じことが言えます。それはただイエス様はマリヤから生れ、十字架にかかって死なれ、三日後に復活されたキリストであることを知識として知っているということではありません。イエス様の弟子のペテロはイエス様が復活され天に戻られてから後に神の霊、御霊を受けて、イエス様こそがキリストである、救い主であるということをエルサレム中に宣べ伝えました。そしてそれを聞いた多くの人々がイエス様を信じたことに困惑したユダヤ教の大祭司たちは、ペテロを捕らえ「おまえは何の権

威によって、まただれの名によってこんなことをしたのか」と尋問しました。ペテロは答えて次のように言っています。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒の働き4章12節）

ここで言われている「私たちが救われるべき名」とは、言うまでもなく主イエス・キリストの御名であります。ペテロは、イエス様が十字架にかかられるまでの三年の間寝食をともにした生活をとおして、またイエス様が復活されて天に上られた後に、イエス様の約束どおりに信じる者に遣わしてくださった聖霊によって霊の目が開かれた自らの体験をとおして、私たち人間を神様に対する罪から救い出してくださることのできる方は、神が人となられたイエス様ご自身のみであり、ほかにはだれもいないことをはっきりと知りました。ですから「私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていない」という表現によって迫害されてもイエス様を証しし続けたのであります。これがイエス様の御名を知っているということであります。

イエス様ご自身も、回心したパウロのところに行くようにとアナニヤに命じられたとき次のようにおっしゃっています。

主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

（使徒の働き9章15節）

イエス様はご自分の名、すなわち神が人となって私たちの罪を贖うために十字架にかかって死んでくださり、よみがえってくださったイエス様を世界中に伝えるため、パウロを「わたしの名」、つまり「イエス様ご自身」を運ぶ器としてお選びになったのです。

私たちも一人ひとり自分の名前を持っています。そして私たちがある人の名前を知っているという場合には、たんに名前を覚えているというのではなく、その人がどんな人かを顔かたちだけでなく、人柄や経歴なども含めて頭に思い浮かべていることが多いのではないでしょうか。このように名前はその人の実体を示すものであります。それと同様に神様の御名を知っている、あるいはイエス様の御名を知っているということは、神様がどんな方か、イエス様がどんな方か、そのご人格とその力を、自分自身が体験して自分の上に現わされた大きな深い愛と、恵みと、あわれみのみわざによってよく知っているだけに止ま

らず、神様、イエス様に信頼して従うこと、神様、イエス様に拠り頼むこと、ゆだねることまでも意味していることなのであります。

パウロがコリントの教会の信者に宛てた手紙の中で、

かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。

（コリント人への手紙第二5章16節）

と言っているのはまさにそのことを指しているのであります。

イエスの御名において

ヨハン・セバスチャン・バッハはご承知のようにマタイ、ヨハネの二大受難曲のほか、数多くのカンタータやコラールなどの教会音楽をはじめとして、クラヴィーアやオルガンやフルートやチェロなどのための独奏曲や協奏曲、管弦楽曲など多くの美しい音楽を作曲した偉大な作曲家です。偉大な作曲家はほかにも大勢いますが、バッハの音楽を聴くとなぜかほかの作曲家の音楽からは得られない深い心の安らぎと喜びを覚えるとおっしゃる方はたくさんおられます。いったいどうしてなのでしょうか。私は最近バッハの妻アンナ・

マクダレーナの書いた「バッハの思い出」という本を読んだとき、その理由はここにあると思わせる箇所に目が留まりました。そこにはバッハは自分の作った曲の大小を問わず、楽譜の冒頭に「イン・ノミネ・エス」という言葉を書き入れていたと書いてあったのです。「イン・ノミネ・エス」とは「イエスの御名において」という意味です。

ふつうならば作曲家は自分の作った曲には自分の名前、あるいは自分であることがわかる記号を書き入れるのが常識であります。私たちは音楽にも著作権があることを知っていますが、これは自分の作った曲は自分のものと主張する権利があるということであります。この権利を主張するために作曲家は自分の名前を楽譜に書き入れるのです。しかしバッハは自分の名前の代わりに「イエスの御名において」という言葉を書き入れました。バッハはどうしてこんなことをしたのでしょうか。それは彼がイエス様の御名を知っていた人であったからであります。バッハが自分の罪を贖うために十字架にかかってくださったイエス様を主と信じ、主なるイエス様に従って生きていたからであります。ですからバッハが楽譜に「イエスの御名において」と書き入れたのは、「私はこの曲を自分のためではなく、イエス様の御名において作りました」というバッハの信仰告白を現わしていると考えてよいと思います。このバッハの信仰をイエス様はたいへんに喜ばれ、大いに彼の音楽を用い

てご自身のご栄光を現わされたのであります。このようにイエス様の御名において作られたバッハの音楽だからこそ、神様はバッハの音楽を聴く私たちの霊の耳に御霊によって安らぎと喜びを与えてくださるのであろうと思います。

私ではなくキリスト

パウロはガラテヤの教会の信者への手紙の中で、

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ人への手紙2章20節）

と言っており、またコリントの信者への手紙の中では、

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

（コリント人への手紙第二5章15節）

とも言っています。またパウロの協力者テモテへの手紙には、

もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。

（テモテへの手紙第二2章11節）

と書いています。ここにある「彼」とはイエス様であります。

晩年、眼の病のために失明し、いよいよ死期が近いことを知ったバッハは、口述筆記によって最後の曲を作ったと伝えられています。その曲は「汝の御座の前に、われいま進み出で」と題したオルガン・コラールでした。このように作曲はバッハにとっていのちそのものであったのです。しかし、バッハは作曲を自分の肉のいのちのためにしたのではありませんでした。パウロが今お読みしたガラテヤやコリントの人々やテモテに宛てた手紙に書いていると同様に、バッハも「自分の古い人は十字架の上でイエス様とともに死んだ。だから自分が作曲するのは、もはや自分のためではなく、自分のうちに生きておられるイエス様のためであり、さらに自分の力で作曲しているのではなく、自分のうちに生きておられるイエス様の御霊が自分を動かして作曲しておられるのだ」という信仰によって曲を作ったのではないかと思われます。まさにバッハは「主の御名において」生きた人でありました。

イエスの御名において生きるキリスト者

さて、このように「イエスの御名において」作曲したバッハの信仰の姿勢、生き方は、実はイエス様を信じる私たちがどのように生きるべきかという、キリスト者の生き方の良い手本を示しているのではないかと思います。

人間はいったい何を目的として生きているのでしょうか。何を目的として生きるかなど考える余裕もなく、その日その日を追われるように生きている人も多いでありましょう。けれども目標を立ててそれに向かって頑張って生きている人も少なくないと思います。その中には世のため、人のためにという目標を立てて生きている人々もあるでしょう。しかし、その目標もつまるところはすべて自分のために立てたもの、自分が満足するため、あるいは自分を喜ばすために立てたものであると言ってもよいのではないでしょうか。たとえば事業をしている人は自分を満足させるために事業が成功することを目的として生きており、サラリーマンは自分を満足させるために昇進し、昇給することを目的として生きており、研究者も自分の探求心を満足させるために研究することを目的として生きており、また学生は自分を満足させるために進学し、就職することを目的として生きているのでは

ないでしょうか。子どもを育てるのもそうだと言えば反対されるかも知れませんが、果たして自分を満足させるためでないと言い切れるでしょうか。そしてそのように自分が立てた目標に向かって頑張って生きるうちに、そこに矛盾や空しさを感じ、生きる張り合いを失う人もまた少なくないのではないでしょうか。

ではイエス様を信じている私たちはどうでしょうか。私自身、胸に手を当てて静かに自分の心を吟味したときに、イエス様を信じ、イエス様に従いたいと思っていながら、空しいと知っていても、つい自分を喜ばすために何かをしてしまう自分、自分を満足させるためについ行動してしまう自分の姿を見い出して嘆かざるを得ません。

いったいイエス様を信じる私たちは日常の生活の中でどれだけ自覚して「イエス様の御名において」生活しているでしょうか。私たちはどれだけ意識して「イエス様の御名において」仕事をしているでしょうか。どれだけ意識して「イエス様の御名において」勉強しているでしょうか。どれだけ意識して「イエス様の御名において」子育てをしているでしょうか。一言で言えばどれだけ意識して「イエス様の御名において」生きようとしているでありましょうか。私たちにとってそのようにはっきりとイエス様を意識して日々生きることはとても難しいことかも知れません。しかし、もし私たちがイエス様の御名を知っ

て、意識してイエス様の御名において生きたいと心から願うならば、イエス様は私たちを御霊で満たしてくださり、私たちをとおしてご自身のご栄光を現わしてくださるはずであります。けれどもイエス様のためでなく自分のために、言いかえればイエス様の御名のためでなく自分の名のために生きているのであれば、そのようなキリスト者をとおしてイエス様はご栄光を現わすことはなさいません。

詩篇115篇の作者は、

私たちにではなく、主よ。私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、
栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。

（詩篇115篇1節）

と祈っていますが、イエス様を信じる私たちも日々の生活の中で心からこのように祈りながら一つ一つの物事に対処するならば、生きるならば、かならずイエス様は喜んで私たちの祈りをかなえて御霊によって導いてくださり、私たちにご自身のご栄光を見せてくださるに違いありません。

イエスの御名において生きるためには

では私たちが「私たちにではなく、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください」と心から祈れるようになるためにはどうすればよいか、もう少し詳しく考えてみたいと思います。それにはまずイエス様を信じた私たちの中にも、まだまだ自我が強く残っていることを正直に認め、悔い改めてイエス様の前にもっと、もっと自我が砕かれるように、そして自分自身を自分の思いで満たすのではなく、御霊によって満たしていただけるようにと心から祈ることであります。私たちがそのようなへりくだった姿勢に整えられていなければ、心から「ただあなたの御名にのみ栄光がありますように」という祈りはできないからです。主なる神様は預言者エレミヤの口をとおして次のように仰せになっています。

主はこう仰せられる。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。

（エレミヤ書17章5～8節）

これは神様、イエス様を信じていない方にではなく、信じている私たちに対しておっしゃっているみことばであります。ここに書かれているとおり、イエス様を信じてはいても、なおイエス様よりも自分に拠り頼む者は主から祝福を受けることはできず、いっぽうイエス様に信頼し、ぶどうの木にしっかり結びついている枝のように、イエス様にしっかり結びつき、拠り頼む者だけが主から祝福を受け、豊かに御霊の実を実らせることができるということを私たちはいつも心に銘じていなければならないと思います。

テサロニケの信者への手紙の中でパウロは、

どうか、私たちの神が、あなたがたをお召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を慕うあらゆる願いと信仰の働きとを全うしてくださいますように。それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあって栄光を受けるためです。

（テサロニケ人への手紙第二1章11～12節）

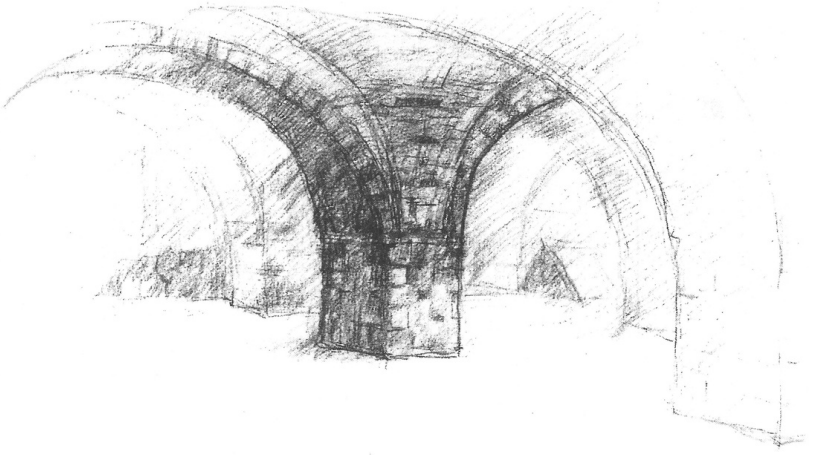
と言っています。このように私たちは、主イエス様が信じる私たちを召しにふさわしい者にしてくださるために、ますます私たちの自我を砕いてくださり、御名において生きる者となることができるようにへりくだらせてくださり、それによって自分ではなく、イエス

様がご栄光を現わされることを喜び、イエス様の御名のみを誇ることができるように、そしてイエス様の御名だけがあがめられますようにと常に心から祈り求めたいと思います。

もう一度冒頭のみことばをお読みして終わります。

御名を知る者はあなたに拠り頼みます。主よ。あなたはあなたを尋ね求める者をお見捨てにはなりませんでした。主にほめ歌を歌え。シオンに住まうその方に。

（詩篇9篇10～11節）



地下聖堂（12－13世紀）
アイルランド・ダブリン市

九　無価値な者を顧みられる主

このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。

（サムエル記第二9章8節）

今日はこのメフィボシェテの言葉から、無価値な者を顧みられる神様と、神様の顧みの対象とされている私たちの態度について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

メフィボシェテに対するダビデの恵み

メフィボシェテはサウル王の子、ヨナタンの子です。五才のとき、ペリシテ人と戦った祖父サウル王と父ヨナタンは戦いに敗れて死に、メフィボシェテは乳母に抱かれて逃げたとき、乳母が彼を落としたので、それから足が不自由になりました。

さて、サウルの子ヨナタンに、足の不自由な息子がひとりいた。その子は、サウ

ルとヨナタンの悲報がイズレエルからもたらされたとき五才であった。うばがこの子を抱いて逃げるとき、あまり急いで逃げたので、この子を落とし、そのためにこの子は足なえになった。この子の名はメフィボシェテといった。

（サムエル記第二4章4節）

サウルとヨナタンが死んでから七年半後、ユダとイスラエルを統一して王となったダビデは、自分の無二の親友であったヨナタンのためにサウル家で生き残った者に恵みを施したいと考えました。そしてヨナタンの子で足の不自由なメフィボシェテがいるのを知ったダビデは人を遣わして彼を連れて来させました。

サウルの子ヨナタンの子メフィボシェテは、ダビデのところに来て、ひれ伏して礼をした。ダビデは言った。「恐れることはない。私は、あなた父のヨナタンのために、あなたに恵みを施したい。あなたの祖父サウルの地所を全部あなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をしてよい。」彼は礼をして言った。「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。」

（サムエル記第二9章6～8節）

死んだ犬のような私

メフィボシェテは、かつては王子として多くのしもべに侍づかれ、富も権力も保証されて、この世的にはこの上ない恵まれた境遇にありました。ところが祖父と父はペリシテ人と戦って敗れて死に、その結果王家は没落し、それ以来彼はかつての家臣の家に隠れるように身を寄せてひっそりと暮らしていました。その上、幼いときに落とされて骨折した両足は萎縮してしまい、成長しても歩くことも不自由なからだになっていました。このようにして彼からは親も富も権力も健康もすべて取り去られてしまったのです。彼はどんなに寂しく、惨めに、悲しい思いで生きて来たことでしょうか。そのような自分を彼は「死んだ犬」のようなものだと思うほどだったのです。イスラエルではどういうわけか犬は卑しむべき動物として、人を蔑む表現に使われています。たとえば、

犬が自分の吐いた物に帰って来るように、愚かな者は自分の愚かさをくり返す。
（箴言26章11節）

という箴言の言葉もそうです。何回も懲りずに過ちをくり返すような愚かな者を犬にたとえて軽蔑しているのです。しかし、わが国でも恥ずべき行ないを「犬にも劣る」というよ

うに言いますから、このようなときに使われる犬の評価もイスラエルと相通じるものがあるのは不思議な気がします。さてその評価の低い犬の、さらに死んだ犬となると、これはもう無価値もいいところではないでしょうか。すなわち彼は自分はもう死んだ犬に等しい、生きていても何の価値もないような者だと思うほどに、自我が砕かれ、低められていたのです。

その彼にまったく思いがけないことが起こりました。ある日ダビデ王から呼び出された彼は、祖父のサウル王がかつて部下であったダビデを殺そうとしたことがあったのを知っていたので、自分にも何かの罰が加えられるのではないかと恐れたのです。しかし、恐る恐るダビデ王の前に出てひれ伏したメフィボシェテに、ダビデは祖父サウル王の財産を全部返そうと言ったばかりか、いつもダビデ王の食卓で王とともに食事をしてよいと言ったのです。彼は自分の耳を疑ったほど驚いたに違いありません。自分に与えられた恵みが信じられなかったからです。そこで彼の口をついて出た言葉が「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか」という問いだったのです。

このエピソードが示すもの

このエピソードは、私たちに二つのことを示唆しているのではないかと思います。一つは無価値な者を心にかけてくださる神様と御子イエス様の恵みであり、もう一つはその恵みをいただく私たちの態度であります。

無価値な者を心にかけてくださる主の恵み

まず無価値な者を顧みてくださる、心にかけてくださる、神様ならびにイエス様の恵みについて考えてみたいと思います。

神様はかつてモーセに次のように言われました。

わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。

（出エジプト記33章19節）

神様の恵みはこのように私たち人間の基準とはまったく違い、神様のみこころ次第なのであります。神様は私たちに価値があるから、私たちが何か努力をしたから、また何か

りっぱな行ないをしたから、その報いとして恵んでくださるのではなく、ただ神様ご自身のお考え、ご意思によって恵んでくださるのです。

イエス様が取税人ザアカイに示された恵みも、イエス様からの一方的なご意思による恵みでした。

イエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

（ルカの福音書19章1～6節）

このエピソードでもわかるように、ザアカイはそれまでイエス様の評判を噂で聞いていただけで一度もお会いしたことがなかったので、まさかイエス様から自分の名を呼ばれる

とは思いもよらなかったのです。しかも「きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから」と言われたので、彼は大喜びしてイエス様を家にお迎えしたのです。イエス様は彼が金持ちだから、あるいは町で尊敬されているりっぱな人物だから、彼の家に泊まろうと思われたのでしょうか。そうではありません。というのは、今のみことばに続いて七節から八節に、

これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」

（ルカの福音書19章7～8節）

とあるように、イエス様は彼が町の人たちからどんな目で見られているかをとっくにご存じであり、またザアカイ自身も自分がどんなに罪深い人間かということも、また町の人みなが自分を軽蔑していることもよく知っていたのです。そんな価値のない自分のところにイエス様が来てくださり、そのような自分を顧みてくださったという恵みを感謝する気持ちから、すなおに「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。ま

た、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します」という表現で、イエス様に罪の悔い改めを告白したのです。

イエス様は、好んでこの世的に言えば価値があるとは思えない人々と食事をされています。

イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっしょに食卓に着いていた。すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人といっしょに食事をするのですか。」イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

（マタイの福音書9章10～13節）

イエス様が取税人や罪人といっしょに食卓に着くということは、ただ食事をともにするというのではなく、彼らと親しい交わりをするという意味を持っております。ここでイエス様ははっきり、ご自分を必要としているのはこの世の基準からみて立派な人、価値ある

人ではなく、罪人であり、また無価値な人であって、そのような人々を招待するために、そしてそのような人々と親しく交わるために、この世に来たとおっしゃっているのです。私たちはここに罪人に仕えるためにおいでになった、愛とあわれみに満ち満ちたイエス様のお姿を見るのであります。

イエス様の恵みをいただく私たちの態度

いっぽう、このイエス様の恵みをいただく私たちキリスト者の態度はどうでしょうか。イエス様の御前に、自分は死んだ犬のような無価値な者というように、ほんとうに砕かれ、低められた態度をいつも取っているでしょうか。自分自身を振り返ってみたとき、残念ながらそれどころか、イエス様の前に大きな顔をしている自分に気づいて、はっとします。日々イエス様からの恵みをいただきイエス様に支えられながら歩んでいるにもかかわらず、そのことをすっかり忘れて自分の足で歩いているような気持になっている自分に気づいて、また口では主の恵みを感謝しますと言いながら、その恵みをほんとうに感謝していない自分に気づいてはっとするのであります。

アブラハムは神様に、

私はちりや灰にすぎません……

（創世記18章27節）

と言っていますが、私たちは自分がちりや灰のような吹けば飛んでしまうような価値のない者であるにもかかわらず、そのような者をイエス様がご自分の尊いいのちを代価として滅びから救い出してくださったことをすっかり忘れて、イエス様が私たちを恵んでくださるのがとうぜんであるかのような傲慢な態度でイエス様の前にいるのではないでしょうか。自分がイエス様とともに食事の席に着くにはまったくふさわしくない者であるにもかかわらず、そのような自分をイエス様が招待してくださることがどんなに恐れ多いことか、どんなに光栄なことか、どんなに大きな恵みかも忘れて、平気で平服のまま食卓に着こうとしているのではないでしょうか。

ダビデは、

あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。

（詩篇8篇3～4節）

と宇宙万物を創造され、支配しておられる偉大な神様がちっぽけな人間を特別に扱ってくださっていることへの驚きを込めてこのように賛美していますが、これはいかに自分が神様の前に無に等しい存在であるかを知って、主なる神を心から恐れ尊んではじめて言えることだと思います。

主とともに食事をいただくとき

さて、メフィボシェテはどうなったでしょうか。サムエル記第二には、

> メフィボシェテはエルサレムに住み、いつも王の食卓で食事をした。彼は両足が共になえていた。
>
> （サムエル記第二9章13節）

と書かれています。彼はその後王の都でダビデ王と同じ食卓で王とともにいつも食事をする恵みに与かっていたのです。そしてその彼の足は依然として砕かれたままであったのです。それではイエス様を信じる私たちはどうでしょうか。私たちにはどんな王にも勝る、王の王、主の主であられるイエス様と同じ食卓でいつも食事をするというたいへんな恵みが与えられているのです。何という恐れ多いことでしょうか。何という光栄なことでしょ

うか。しかし、そのようなすばらしい恵みに与かる私たちは、ほんとうにメフィボシェテの足のようにいつも砕かれたままでありましょうか。私たちはいつも心砕かれ低くなって、自分の力では一歩も歩けない足のなえた者であることを自覚しているでしょうか。もし私たちがそれを自覚していれば、イエス様はヨハネの黙示録の中に記されているように、

見よ。わたしは戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（ヨハネの黙示録3章20節）

と信じる者に呼びかけられることはないはずです。私たちが砕かれて自分が足の萎えている者であり、何の価値もない者であることを知って心の戸を開けたときこそ、ほんとうにそのような無価値な者を顧みて食事をともにして親しく語りかけてくださる王の王、主の主であられるイエス様のかぎりない愛とあわれみを身にしみて覚えることができ、そのイエス様に心からの感謝をささげる者となれるのではないでしょうか。

聖歌五二二番は地のちりに等しいような価値のない者に救いの恵みを与えてくださったイエス様に対する賛美の歌です。この歌詞をお読みし、ともに心から主を賛美して終わり

たいと思います。

地のちりに等しかり、なにひとつとりえなし、
今あるはただ主の愛に生くるわれぞ。
み救いを受けし罪人に過ぎず、
されどわれ、人に伝えん、恵みふかきイエスを。

罪の世を望みなく、いくとせか迷いしを、
ただ君が愛もて救いませるわれぞ。
み救いを受けし罪人に過ぎず、
されどわれ、人に伝えん、恵みふかきイエスを。

もし恵みなかりせば、はや滅びはてしならん、
あるはただ罪のみ、功なきわれは。
み救いを受けし罪人に過ぎず、
されどわれ、人に伝えん、恵みふかきイエスを。

されば世にあるかぎり、主をうたい、主をたたえん、
滅びよりいのちに、移されたるわれは。
み救いを受けし罪人に過ぎず、
されどわれ、人に伝えん、恵みふかきイエスを。



イングランドの田園

十　御子を信じる者がひとりとして滅びることなく

―あるキリスト者の葬儀でのメッセージ―

ただいまご紹介いただきました吉祥寺キリスト集会に集っております重田でございます。本日、Aさんのご葬儀の場でメッセージをするようにとのご依頼を受けましたので、これから神のみことば、真理のことばである聖書は、Aさんの死をとおして何を私たちに示しているかということについて、皆様とごいっしょに考えてみたいと思います。

人間はなぜ死ななければならないのか

今日ここにお集まりの皆様方は、Aさんの心不全による突然の死の報に接してほんとうに驚かれ、また悲しんでおられることと、心からお察し申し上げます。一昨日までお元気であられた方のご遺体が、今こうしてお棺の中に横たわっておられます。死というのはいったい何なのでしょう。どうして私たち人間は死ななければいけないのでしょうか。

日頃元気なうちは、私たちは死の問題について考えることはほとんどありませんし、また、もし頭に浮かんだとしてもまだ先のことだから考えないようにしようと避けてしまうのではないでしょうか。しかし、親しい方の死を目の前にしたとき、どうして人間には死があるのだろう、どうしてこんなに悲しいことに会わなければならないのかと、どなたでも真剣に考えざるを得ないのではないかと思います。

聖書には次のような言葉が記されております。

祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。

（伝道者の書7章2節）

これは真理であります。死は人間の最大の敵と言ってもよいと思います。もし、この恐ろしい死を克服できたら何とすばらしいことでしょうか。昔からそのことに人間は知恵をしぼってまいりました。医学の誕生と進歩はこの人間の切なる願いに応えるためのものでもありました。ご存じのように、医学は人間の寿命をある程度延ばすことには成功いたしました。けれども、どんなに医学が進歩しても、決して死に勝つことはできません。人間は生まれたからにはかならず死ななければならないのであります。聖書の詩篇には、

いったい、生きていて死を見ない者はだれでしょう。だれがおのれ自身を、よみの力から救い出せましょう。

（詩篇89篇48節）

という箇所があります。また、

風を支配し、風を止めることのできる人はいない。死の日も支配することはできない。この戦いから放免される者はいない。

（伝道者の書8章8節）

とも記されています。これも真理であります。

罪から来る報酬

どうして人間には死があるのでしょうか。この問題は私たちがいくら自分の頭で、いや人間の頭で考えてもわかりません。古今東西の哲学者はこの問題を考えてきましたが、いまだに解決されておりません。

しかし、聖書は明解に「死は人間の罪の結果である」と言っております。この罪とは私たちが考えているいわゆる「人間が人間に対して犯す罪」ではなく、また法律で言ってい

る罪でもありません。聖書で言っている罪というのは、私たちを造ってくださった創造主である神様のことをすっかり忘れ、神様に背を向けて自分勝手に、自己中心、人間中心に生きることであります。神様のみこころに従うのではなく、自分の思いに従う、これが罪であります。英語で「罪」という言葉は二つあります。クライムという言葉とシンという言葉です。日本語では「罪」という言葉は一つですから、どう違っているのかわかりませんが、ＣＲＩＭＥというのは法律的な罪のことであり、ＳＩＮというのは私たちの心が犯す罪です。ＳＩＮの綴りの真ん中にあるのはＩ、すなわち「自分」です。自分がいつも中心にいる、そういうわがままな、自分勝手な生き方がＳＩＮという罪とお考えになってよろしいと思います。そうであれば人間はすべてひとり残らず神様に対してＳＩＮという罪を犯していることになります。聖書の中にこういう言葉があります。

義人はいない。ひとりもいない。

（ローマ人への手紙3章10節）

聖書で「義人」というのは神様から正しいと認められる人のことを指しますが、そのような人はだれひとりいないのです。

私たちすべてが出会わなければならない死は、この罪によって汚れてしまった結果とし

て生じたものであります。聖書の神様は創造主の神様であり、完全に聖く正しい方であります。したがってＳＩＮという罪を持った者に対しては、神様はその聖く正しいご性質のゆえに厳しく裁かれるのです。罪を持ったままでいる者を見過ごすことはおできになりません。それが聖書の神様であります。それでは神様はあまりにも厳しすぎるのではないかとお思いのことでしょう。

御子イエス・キリストによって与えられた永遠のいのち

しかしながら、このまったく正しい神様は同時に、

わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。

（エゼキエル書33章11節）

とおっしゃるように、まったき愛の神様でもあるのです。では、神様に背を向けたままでただ死を恐れている私たち人間を救い出すために、神様は何をしてくださったのでしょうか。神様はご自分のひとり子であるイエス・キリストを私たち人間の歴史の中に送ってくださったのであります。これこそ、まったき愛というほかありません。聖書に、

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

（ヨハネの福音書3章16節）

とあります。「世」とはまさに神様に背を向けて自分中心に生きるという罪に満ちたこの世界とそこに住む人々のことを指しています。神様はそのような人々をも愛してくださって、

それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネの福音書3章16節）

と約束してくださったのです。

さらに次のようなみことばによっても、イエス・キリストを信じる者に永遠のいのちがはっきり約束されています。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ人への手紙6章23節）

もうすでに皆様方もおわかりのことと思いますが、この神様のかぎりない愛をいただく

ためには、私たちがしなければならない大切なことがあります。そこでイエス様のおっしゃった次のみことばについて考えてみたいと思います。

医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。

（ルカの福音書5章31～32節）

私たちは自分は丈夫だとか、健康だとか思っております。とくに健康診断で異常がないと言われた方々は、「自分は健康だ、丈夫だ」と思っておられるでしょうが、実はそうではないのです。なぜでしょうか。それはみな罪という病気にかかっているからなのです。この病気はガンよりも怖い病気です。なぜなら医学では治せないからです。この罪という病気を治すことのできる唯一の名医は神が人となられたイエス・キリストであります。私たちがその罪という病気にかかっている自分に気づいて、「自分は神様をないがしろにしていたどうしようもない人間で、隣人を自分と同じように愛することなどとてもできないし、正しいこと、立派なこと、善いことをしたいと思っても、実は何もできない。またそんなことを少しでもするとかえって傲慢になって、自分は人よりも優れた者、立派な者だと思い上がり、傲慢の罪を犯してしまう」というように、どうしても離れることのない自

分の罪を認めて、「神様あわれんでください、こんな者を赦してください」と心から悔い改めて神様の前に出たとき、神様は何とおっしゃるでしょう。「それがわかればよい。あなたの罪は癒された。もうあなたは聖いのだ」と言ってくださるのです。このように、私たちが神様のかぎりない愛をいただくためにしなければならない大切なことはこの悔い改めであります。では、悔い改めたとき罪が赦され、聖くしていただけるのはいったいどうしてなのでしょうか。

それは神の御子でありながら人となられたイエス様が身代わりとなってその罪を負って十字架で死んでくださったからなのであります。私たちの罪が聖められるには完全に聖いお方によって罪の代価が支払われなければならなかったのです。ですからイエス様にこの罪という病気を治していただくしかないのであります。私たちが自分の罪に気づき、心から悔い改めて救いを求めるとき、イエス様はご自分が流された血潮で私たちを聖めてくださいます。こうして罪が聖められた者を神様はご自分の子どもとしての身分をくださるばかりか、この世の歩みに終止符が打たれたとき、その人の霊は黄泉（よみ）に下ることは決してなく、神の子どもとして直ちに神様のもと、すなわち天の御国に引き上げられるのであります。

霊のよみがえりと肉体のよみがえり

「それではいったい肉体のほうはどうなるのか。霊だけが天国に行っても、霊は裸ではないか。肉体はお墓に入って霊とは別れわかれになるのか」というように思う方がおられるのではないでしょうか。これはたいへんな問題です。作家の司馬遼太郎さんは皆さんご存じと思います。司馬さんは北陸の方で、浄土真宗を信じておられました。その司馬さんがある日、有名なお坊さんに「いったい人間は死んだら霊と、からだはどこへ行くのですか」と質問したそうです。しかし、そのお坊さんは司馬さんに納得がいくように答えられなかった。それで司馬さんは「仏教はこんな立派なお坊さんでも、いちばん人間が知りたい、心配している問題に何らはっきりとした解決の道を与えてくれないではないか」と失望し、今度は聖書を読まれたそうです。そして自分の疑問に答えてくれたのは聖書だけだ、と本に書いておられました。

ではその重大な問題について聖書には何と書いてあるのかということを、これから少しお話ししたいと思います。聖書にはイエス様を信じて死んだ者の肉体はやがてよみがえると書いてあります。「そんなことはあるはずがない、人間は死んだら生き返るなどという

ことはあり得ない」とお思いのことでしょう。私も医者ですから医学の基準で考えれば、それにはまったく同意見です。

しかし、イエス様は十字架にかけられて墓に葬られ、事実、三日後に復活なさったのです。作り話ではないかと思われるかもしれませんが、そうではないのです。復活されてから天に昇られるまでの間のイエス様のお姿をたくさんの人が見ております。聖書には五百人以上と書かれています。その中にははもちろん、イエス様に終始つき従っていた弟子たちも含まれております。しかし、トマスという弟子は他の弟子たちの前に復活されたイエス様がお姿を現わされたとき、そこにはいませんでした。そして弟子たちからイエス様が復活されたということを聞いて、「私はその手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきばらに差し入れてみなければ決して信じません」と言いました。するとそこにイエス様が現われて、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばしてわたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」とおっしゃったのです。トマスはたちどころに「わたしの主、私の神」と復活のイエス様の前にひれ伏しました。そのトマスにイエス様は「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです」と仰せになったのであります。

そのほか、聖書に記されている数々の証拠を復活されたイエス様はお示しになりました。イエス・キリストは聖霊によってマリアからお生まれになった血と肉を持った方ですけれども、同時に神の御子ですから神様であります。神様は何でもおできになる全知全能の方です。イエス・キリストも神様でありますから、そのイエス様が復活されても何ら不思議はありません。イエス様は人としてこの世にお生まれになったのですから死ぬこともおできになった。それと同時に復活することもおできになった。それは神と人との両方のご性質を持っておられたからです。そのイエス様がご自分を信じる者に対して、「あなたはわたしを信じているから、やがてわたしがもう一度あなたがたを迎えに来るときに、わたしの復活のからだと同じからだによみがえらせてあげよう」とはっきり約束してくださっているのです。聖書にはそのことが次のように書かれております。

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

（ヨハネの福音書11章25節）

これは霊のよみがえりのことだけでなく、肉体のよみがえりのことも言っておられるのであります。別の箇所ではまた、

わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。

（ヨハネの福音書6章38～40節）

とはっきりおっしゃっています。

人が「死に勝利する」ということは、このようにイエス・キリストを信じることによって、霊だけでなく、肉体もよみがえることであります。その時期はいつなのか、明日なのか、私たちにはわかりませんけれども、それは前にも申しましたように、復活された後、天に戻られたイエス様が信じる者を迎えにふたたび来られるときと聖書に書かれております。そのとき、イエス様は天国でご自分のそばに置かれた方々の霊を連れて来られるのです。Aさんもそのひとりであります。そして墓の中に納められていたAさんのお骨を、死ぬことのない体、朽ちない体、聖い完全な体、栄光の体、すなわちイエス・キリストの復

活の体と同じ体によみがえらせ、いっしょに連れて来られたAさんの霊とよみがえりの体とが一つにされて、ふたたびイエス様とともに天に引き上げられ、もう死ぬことのない、また罪を犯す可能性のない、完全な霊とからだで永遠に神様とともに生きるのであります。これが聖書に記されている「死からの勝利」であります。聖書はこれについて次のようにはっきりと言っております。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ人への手紙3章20～21節）

イエス様を信じる者はこの日を心から待ち望んでいるのであります。

このようにイエス・キリストは十字架の死と復活のみわざによって人間を罪から救い出し、霊と肉体のよみがえりを与えるために、神であられながら人としてこの世に来てくださったのであります。したがいまして、このイエス様をご自分の心に救い主としてお受け入れになるか、ならないかは、永遠のいのちか、永遠の滅びかの分かれ目であります。天

の御国を仰ぎ見ながら希望を持って、喜んでこの世の死を迎えるか、あるいは絶望しながら、恐れながら、悲しみながら死を迎えるかの分かれ目であります。

ほんとうに安心して死を迎えることができるためには

最近、医療の現場では、どうしたら患者さんが安らかに死を迎えることができるかという、いわゆる終末医療、ターミナル・ケアに力を入れはじめております。しかし、人間がほんとうに安らかに死を迎えることができるためには、これまでお話しいたしましたように、罪の病の問題を解決しておかなければなりません。この問題の解決は医療によって、医学によって、あるいはもっと端的に申しますと、人間の手によっては決してできません。けれども心砕かれ悔い改めてイエス様の前にお出になる方にはすべて、この罪の病からの解放と死からの完全な勝利が与えられるのです。イエス様を信じ、この罪の病と死から解放されておられたAさんは今天国におられます。イエス様と顔と顔を合わせて、ご自分を天国に召してくださったイエス様に感謝して、どんなに喜んでおられることでしょう。聖書に、

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（ヨハネの黙示録21章3～4節）

と記されているとおりであります。

本日ご列席の皆様も、生前親しく交わられたAさんに天国でふたたびお会いになることが可能であります。けれどもそのためにはAさんのように、ご自分も神が人となられ、お一人おひとりのために身代わりに罪を負って死んでくださったイエス・キリストを信じていただくことが必要であることを、どうかAさんのご召天をとおして知っていただきたいと存じます。

人間は生まれたときからひとり残らず死に向かって歩きはじめます。例外はないのです。そして人間は自分がいつ死ぬのか、自分ではわからないのです。私たちはいつ神様にお会いしてもいいように、今からその準備をしておく必要があると思います。天国におられるAさんも愛する親しい皆様がイエス・キリストを信じ、死の問題を解決されて、やがてす

ばらしい天国で喜びの再会ができるように心から願っておられることと確信いたします。



ロンダ谷のボタ山（炭坑）
南ウェールズ

十一　天の御国目指して歩む旅人

私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです。

（詩篇39篇12節）

旅行と旅

この詩篇はダビデの作と言われております。ダビデはここで自分は神様とともに旅する旅人ですと言っています。そこで今日はこの「私はあなたとともにいる旅人」ということについてごいっしょに考えてみたいと思います。最近はあまり使わなくなった旅人という言葉はなつかしさを覚える、私も好きな言葉です。それとともに旅という言葉も使わなくなり、それに代わって使われるようになったのは旅行という言葉です。旅行という言葉からは、名所を見物したり、美しい景色や珍しい風物を観賞したり、あるいは美味しい食べ

ものを賞味したり、温泉につかってゆっくり休息するというような、楽しいものを私たちは想像します。それに対して旅という言葉から私たちは何を想像するでしょうか。ある辞書を引いてみましたら、「旅とは住んでいるところから離れてよその土地に行く」とありました。そうなると、これは今の旅行とはだいぶ違うものであります。そう考えますと昔の人は旅行ではなく、みな旅をしていたのです。旅ということになると、それなりの覚悟が必要になります。昔、旅立ちのときには水さかずきを交わしたそうですが、それは帰って来れないかも知れない可能性もあるからです。旅の間にはいろいろなことが起こりますから、出かける方も、送る方も覚悟して出かけたのです。今日では旅行には飛行機や列車や車などいろいろな乗り物があって快適な旅行ができますが、昔は乗り物といえばせいぜい駕籠や馬に乗る程度でほとんどは自分の足で歩いて旅をしたのです。ですから快適どころか汗を流したり、凍えたり、足にまめを作ったりというようにたいへんな苦労をしながら旅を続けたのだと思われます。道にしても平坦な道だけではなく、険しい山坂あり、流れの急な川ありという道でありました。また道に迷うこともあれば、旅の途中で病気になったり怪我をしたり、あるいは強盗に会うこともあったでしょう。このような苦しい目やときには生命の危険にさらされながら目的地に向かって一歩一歩進んで行く、これが旅

であります。そのような旅の中でも私たち一人ひとりが今でもしている旅があります。それは人生の旅であります。では人生の旅はいつが出発のときかといえば、言うまでもなく生まれたときであります。では人生の旅の終着点はどこでしょうか。これも言うまでもなく死であります。

キリスト者の旅

今、人生の旅は生まれたときにはじまって死をもって終わると申しましたが、人生の旅にはもう一つの旅があります。それは生けるまことの神を主と仰ぐ信仰者の旅、イエス・キリストを救い主と信じ、従う者の旅であります。

冒頭の詩篇は前にも申しました、まことの神を主と仰ぎ、主とともに旅をした信仰者ダビデの作った詩ですが、同時にこの詩はイエス・キリストを主として従う私たちの思いでもあるといえましょう。ではこれから私たちイエス・キリストを信じる信仰者の旅についてごいっしょに考えてみたいと思います。

まず信仰者の旅はどこからはじまるのでしょうか。イエス様を信じる者も信じる以前は他の人とまったく同様に、この世に生まれたときからはじまる人生の旅を旅していました。

しかし、イエス様を信じてからの信仰者の旅はキリスト者として生まれ変わったときから新たにはじまるのです。ではキリスト者の旅の終わりはどこでしょうか。それは人生の旅が死という暗いやみで終わるのとは違って、神様のまばゆい光に包まれた天の御国という目的地に入るところで終わります。キリスト者の誕生については聖書は次のように言っています。

この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

（ヨハネの福音書1章12～13節）

「この方」とはイエス様であります。私たち人間を愛してくださっている神様に背を向けて自分勝手に我がまま放題に生きるという罪を犯したために滅びに定められているすべての人間を救い出すために、神様から遣わされて私たちの罪を身代わりに負って十字架で死んでくださり、三日後に復活された神のひとり子イエス様であります。自分にもこの罪があることを率直に認め、心からこの罪を悔い改め、イエス様こそ、自分ではどうすることもできない罪を身代わりに負って十字架の上で死んでくださった方と心から信じたとき、

神様はそれまで罪の奴隷であったその人を神の子どもに生まれ変わらせてくださいます。神によって生まれた者、これがキリスト者であります。

このようにして新しく生まれ変わった信仰者は、そのときから旅の目的地、ゴールである天の御国目指して信仰の旅に出るのであります。しかし、天の御国目指しての旅路も先ほど挙げたこの世の旅路と同じように決して楽ではなく、その道は狭く、険しく、迷いやすく、途中には荒れ果てた土地や大きな穴や深い泥沼や大きな川があります。また旅の途中では誘惑されたり迫害を受ける危険がいつも伴ないます。そのような道を信仰者は旅をするのであります。

神様の仰せに従って信仰の旅に出た人々

ヘブル人への手紙には主なる神様の仰せに従って信仰の旅に出た多くの人々について書かれていますが、そのうちアブラハムについては次のように記されています。

信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続

するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

（ヘブル人への手紙11章8～10節）

主なる神様がアブラハムに「あなたは、生まれ故郷から出て、わたしの示す地に行きなさい」と仰せになったとき、彼はすでに七十五才でした。けれども彼は神様の仰せにすなおに従って住み慣れた生まれ故郷を出て示された土地であるカナンに旅立ちました。そして彼は約束の地カナンに着いてからも、その土地で他国人、旅人として家族たちとともに天幕生活を続けたのです。それはカナンの地もアブラハムにとって最終の目的地ではなかったからです。アブラハムらは、この地上にはほんとうの故郷はなく、この世にある間はどこにいても旅をしている旅人であることを自覚していました。そして目に見えない天の都をまことの故郷として、目で見ているように確信し、日々主なる神様に信頼しながらこの世の旅路を歩んでいたのであります。

これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。彼らはこのように言うことによって、自分の

故郷を求めていることを示しています。もし、出てきた故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会はあったでしょう。しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

（ヘブル人への手紙11章13～16節）

このみことばどおり、主なる神様に信頼して、主の仰せに従って信仰の旅を旅した信仰の先輩たちは、地上における旅路の終わりに、主が用意されたまことの故郷である天の都に入ることができたのであります。

イエス様を信じる旅人がこの世から迫害される理由

しかし、前に申しましたように、天の御国への旅を妨げるものはたくさんあります。が、なかでもサタンはいろいろな手段を使って信仰者の旅を妨害してきます。かつて自分の支配下にあった私たちがイエス様を信じて神に属する者に生れ変わったことを憎むからです。信仰者の旅人がこの世の人からあざけられ、うとまれ、場合によっては迫害されるのもサ

タンのしわざであります。しかし、この世の人々はどうして信仰者の旅人を迫害するのでしょうか。それはイエス様を信じている旅人がこの世の人々と違うからであります。

イエス様を信じる旅人は衣服が違う

どこが違うかといえば、まず身に着けている衣服が違います。この衣服は私たちがからだにまとう、目に見える衣服ではなく、霊が着る霊的な衣服のことを指しています。

ヨシュアは、よごれた服を着て、御使いの前に立っていた。御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言った。「彼のよごれた服を脱がせよ。」そして彼はヨシュアに言った。「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」

（ゼカリヤ書3章3～4節）

このヨシュアとはバビロンにユダヤの民とともに捕らえられていたユダヤの民の指導者、大祭司ヨシュアですが、イエス様を信じた私たちも、イエス様によって罪に汚れた不義という服を脱がせていただき、礼服を着せていただいた者です。この礼服はイエス様を救い主と信じる信仰によって与えられた義の礼服であります。イエス様を信じた者はこの義の

礼服を着て天の御国に向かって旅立つのであり、信じてから天の御国に着くまではずっと義の礼服を着て旅を続けるのであります。

イエス様を信じる旅人は語る言葉が違う

またイエス様を信じる旅人がこの世から迫害されるのは、語る言葉が違うからです。パウロは次のように言っています。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（コリント人への手紙第一 1章18節）

「十字架のことば」とはイエス・キリストの十字架上の贖いのみわざによって、人間が神様に犯した背きの罪の刑罰から救われるという良き知らせを指します。イエス様を信じる者は与えられた御霊によって、この十字架の言葉を語るごとに喜びを覚え、また慰められ、元気が与えられます。けれどもこの世の人は、この世の知恵の言葉には聞く耳を持っていますし、この世の賢人とか知者といわれる人の言うことには耳を傾けますが、御霊を持っていないために十字架の言葉はわからず、愚かに聞こえるのであります。

イエス様を信じる旅人は価値観が違う

またイエス様を信じる旅人がこの世から迫害されるのは、この世と違う価値観を持っているからであります。パウロは次のように言っています。

しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

（ピリピ人への手紙3章7～9節）

イエス様を信じる私たちはパウロのように、この世の一切のものをちりあくたと思うほどまだ信仰は強くありません。しかし、そのような私たちでもイエス様を信じる前と後では、この世に対する価値観が知らず知らずのうちに変っており、主イエス様のすばらしさ

のゆえに、それまで大切だと考えていた、この世的に価値あるものを空しく思う自分に気づいて、我ながら驚くのであります。そして同時にこの価値観の変化は自分の意思の力によってもたらされたものでなく、信じる者の中に住んでくださるイエス様の御霊のお働きによるものであることを知って、改めて主の恵みにただ心から感謝するのであります。

イエス様を信じる旅人にささやくサタン

このように、イエス様を信じる旅人は、この世の人々と衣服も違い、言葉も違い、価値観も違います。しかし目的地は違っても、イエス様を信じる旅人の道もこの世を通っていますから、旅の道中で人生の旅をしているこの世の旅人との出会いや交わりは常にあります。そこで、衣服が違い、語る言葉が違い、価値観が違うがゆえのいろいろな迫害が起こるのです。そのときサタンはイエス様を信じる旅人に対して次のようにささやきます。「あなたはどうして世の中の人々と違う服を着ているのですか、どうして世の中の人々と違う言葉を語るのですか、どうして世の中の人々と違う価値観を持つのですか。世の中の人々があなたを受け入れず、馬鹿にしたり、敬遠したり、迫害するのはそのためなのですから、ときにはあなたの今着ているイエス・キリストによる義という礼服を脱いで、彼らと同じ

善行や慈善による義という服を着たらどうですか、ときにはあなたが語る十字架の愛という言葉の代わりに彼らが使っている人間愛という言葉で話したらどうですか、あなたが持っているイエス・キリストの信仰に基づく価値観を捨てて、ときには彼らと同じような学問、道徳、倫理に基づく価値観を持ったらどうですか、そのようにして世の中の人々と調子を合わせれば彼らはあなたを受け入れ、お互い仲良く、楽しい旅ができますよ」。しかし、これこそ天の御国への旅を妨げようとするサタンの落とし穴であります。

イエス様を信じる旅人はともに旅してくださるイエス様によって常に守られる

イエス様を信じる旅人である私たちは、この世の旅人とは衣服も、語る言葉も、価値観も違うとはいえ、まだまだ信仰が弱く、ときには旅に疲れて足がふらつき、またサタンのささやきに気を取られてサタンの仕掛けた穴に、泥沼に落ち込むことがあります。しかし、幸いなことに私たちはそのときどうするかを知っています。穴や泥沼に落ちたと知ったらすぐに、イエス様に助けを叫び求めればよいのです。私たちの叫び声をお聞きになったイエス様はすぐに穴から、泥沼から引き上げて安全なところに置いてくださるからです。ダビデは次のように神様に感謝の祈りをささげました。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。

（詩篇40篇1～2節）

もう一つ、天の御国にはいる前にイエス様を信じる旅人は死の川を渡らなければなりません。死の川は天の御国への旅路の中で最大の難所であるといえましょう。けれどもイエス様がともにいてくださるという確信をしっかり持っていれば、私たちはイエス様にすがって死の川も恐れることなく渡ることができます。主が次のように私たちを励ましてくださるからです。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。

（イザヤ書43章1～2節）

「死の川の水の中を過ぎるときも、死の川を渡るときもあなたは溺れない。それはわたしがあなたとともにいるからだ」これがイエス様の私たちに対する約束であります。その

イエス様のみことばを確信して死の川を渡れば恐れることはないのです。

聖歌四九一番の歌詞は天の御国に旅する私たちイエス様を信じる者への大切な心構えが歌われています。

天つ国をさして、なれはたどるや、
イエスにゆだねまつれ、汝がすべてを。
見失うなかれ、導く君を、
昼も夜もなれがそばにます主を。

見よ、主は進みたもう、狭き道をば、
目を奪う迷いの原、行くときに。
見失うなかれ、導く君を、
昼も夜もなれがそばにます主を。

「われはともにあり」と、イエスはささやく、
雲も暗き夜も、など恐るべき。

見失うなかれ、導く君を、
昼も夜もなれがそばにます主を。

天つ国にはいる、朝は間近し、
主なる君の姿、なお見つづけよ。
見失うなかれ、導く君を、
昼も夜もなれがそばにます主を。

この歌詞のとおり、イエス様を信じる旅人の私たちは昼も夜もともにいて導いてくださるイエス様を見失わないよう、祈りながら旅をすることがもっとも大切であります。この歌詞にあるように天の御国に入る朝はもう間近かであります。険しい長い旅で足が弱り、よろめきがちな私たちにとって、天の御国が近いということは大きな希望であり、その希望によって私たちはふたたび元気を出して旅を続けることができるのです。

イエス様を信じる旅人に託されている大切な務め

さて最後に、天の御国目指して旅する私たちイエス様を信じる者は、神様からたいへん

重要な任務が与えられているということを忘れてはならないと思います。それは主イエス・キリストを証しするということであります。天の御国への旅路はこの世を通っています。したがって旅の道中で多くの旅人に出会います。これらの人々の中には私たちを軽蔑したり、敬遠したり、迫害したりする人があると先ほど申しましたが、そのような人ばかりではなく、人生の旅をたどる間にいろいろな苦難に会って自分の無力さ、愚かさを知った旅人、人生に絶望した旅人、悲しみ、苦しんでいる旅人にも出会います。それらの旅人の中には彼らから見て変わった服を着て、変わった言葉を使い、変わった価値観を持つイエス様を信じる私たちが、苦しい目にあって、よろめきそうになっても倒れずに希望を持って旅を続けるのを見て不思議に思い、心を開いて来る人がいます。神様がその旅人の心を砕いて導いておられるからです。そのときがイエス様を証しする機会であります。その旅人にとってイエス様を知る機会はただ一度しかないかも知れません。ですからその機会を逃さないようにイエス様を信じる旅人はいつも目を覚ましていることが大切です。ペテロは天の御国目指して旅を続ける私たちイエス様を信じる者に対して次のように勧めています。

愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたが

たは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。異邦人の中にあって、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。

（ペテロの手紙第一　2章11～12節）

ここに記されているような「たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざける」ことも、また「異邦人の中にあって、りっぱなふるまいをする」ことも自分の意思や力で決してできないことは私たち自身がすでに痛いほど知っています。ただひたすら、ともにいてくださるイエス様におゆだねして、祈りながら日々の旅を歩み続けるときに、信じる私たちの中で御霊が働いてくださり、おのずとこの世の旅人の証しとなるような歩みができるのではないでしょうか。このようにして、天の御国への旅の間に、次々と新しいキリスト者が誕生して、天の御国目指す旅人としてともに手を携えて旅することができたならば何と幸せなことでありましょうか。



スレート鉱山の駅
北ウェールズ

十二　終わりまで歩み、休みに入れ

あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。

（ダニエル書12章13節）

今日はこの聖書のみことばについてごいっしょに考えてみたいと思います。

「あなた」という呼びかけ

私がこのみことばを読んだとき、これは神様が私自身に呼びかけておられるのだと思いました。どうしてそのように思えたのでしょうか。聖書の中で「あなた」という呼びかけをしている箇所がたくさんありますが、この箇所もそのように、ダニエルという預言者に対して神様が仰せになったみことばです。ですから、これはダニエルに神様がお命じになったことであると思うのがふつう一般の受け取りかたでありましょう。私もかつては聖

書をそのように読んでいました。たとえば「イザヤ書は、イザヤが神様から霊的に導かれて書いたものなのだから、その中で『あなた』と書かれていればイザヤに対する神様の呼びかけである」というように考えていました。ですからイザヤ書を読んでも、自分を第三者の立場に置いて「なるほどイザヤはそうだったのか、そのように神様の呼びかけに従ってゆくイザヤの信仰は立派だな」と感心して終わっていたのです。けれども、そのような読み方をしているかぎり、聖書のみことばをとおして神様と交わることはできないのです。

神の召命を受けた人々

いっぽう聖書を読んでいるとき「このみことばは主が自分に仰せになっているのだ」と示されれば、その人は神様の召命を受けたと言ってよいのではないでしょうか。神様の召命とは何かといいますと、神様がご自分のしもべとして用いようと、ある人を呼び出されること、お召しになることです。考えてみればこれはたいへんなことであります。しかし、聖書には神様のご用のために召し出された人たちがたくさんおります。そのうちの何人かについて神様がどのように呼びかけられたのか、そして呼びかけられた人がどのように応じたのか見てみましょう。

まず預言者イザヤであります。

私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

（イザヤ書6章8節）

ここで「われわれのために」と神様が複数形で仰せになっているのは、父なる神と御子なる神であるイエス様を指しておられるのですが、その御声を聞いてイザヤはすぐこれは自分に行きなさいと神様が仰せになっているのだと示されました。そこで彼はすぐに「私がおります。私を遣わしてください」と神様に申し出たのです。

次に預言者エレミヤの例を見ましょう。

次のような主のことばが私にあった。「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなた

に命じるすべての事を語れ。彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。――主の御告げ。――」そのとき、主は御手を伸ばして、私の口に触れ、主は私に仰せられた。「今、わたしのことばをあなたの口に授けた。」

（エレミヤ書1章4～9節）

このように、はじめエレミヤは「自分はまだ若いのでどのように語ったらよいのかわからない」と言って尻込みをしました。けれども神様は「わたしがいっしょにいて助け、言うべき言葉も教える」と約束されたので、エレミヤもようやく神様の召命を受け入れたのです。

エレミヤよりももっと神様のお召しに抵抗した人がいました。それは預言者ヨナであります。

アミタイの子ヨナに次のような主のことばがあった。「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨッパに下った。彼は、タルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払ってそれに乗り、主の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュへ行こうとした。

（ヨナ書1章1～3節）

ヨナは神様の召命を避けて逃げようとしました。しかし、けっきょく彼は悔い改めて神様のお召しに従い、ニネベに行って神様のみこころを伝えたのです。

以上の例でおわかりのように、神様の召命を受けたときに取った態度はそれぞれに異なりますが、けっきょくは召してくださった神様のみこころに従って、神様のしもべとして用いられる者になったのです。

このように、神様が直接ご自分のみこころを伝えるご用のために召し出されたのが預言者です。しかし、神様が御子イエス様を人としてこの世にお遣わしになってからは、イエス様が弟子をお選びになりました。

イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」彼らはすぐに網を捨てて従った。そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、

ふたりをお呼びになった。彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。

（マタイの福音書4章18～22節）

このようにして、イエス様は十字架と復活によって成就された罪の救いの福音を世の人々に伝えるご用のために、彼らを召されたわけであります。もうひとり、復活後のイエス様に召し出された人がいます。それはパウロ、当時の名はサウロであります。

ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町にはいりなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」

（使徒の働き9章3～6節）

イエス様はパウロを召すために、アナニヤという弟子を彼のところに遣わそうとなさいますが、アナニヤはキリスト者を迫害していることで知られているパウロを恐れました。しかしイエス様はアナニヤに次のようにおっしゃいました。

主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

（使徒の働き9章15～16節）

イエス様は、ご自分を迫害している者さえもこのように召し出されるのであります。パウロはこの後大いに用いられて殉教の死を遂げるまでイエス様の福音を当時の世界に広く伝える働きをしました。

キリスト者も召しに与かっている

しかし、以上に挙げた人々だけが神様やイエス様から召命を受けたのではありません。イエス様を信じて罪が赦され、この世から聖め別たれた私たちも、神様の救いに与かった聖徒として、その救いのみわざを人々に宣べ伝えるために召しに与かっているのです。ペテロは次のように言っています。

ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。

（ペテロの手紙第二1章10節）

イエス様を信じた私たちは、このように召されたこと、選ばれたことを確かなものにするよう勧められています。「召されたこと、選ばれたことを確かにする」ということは、イエス様の十字架と復活による救いのみわざを日々の生活をとおして世の人に熱心に証しするということによって、自分がイエス様に選ばれ、召し出された者としての自覚を確かなものとするということであります。

けれども、たいへん悲しいことに、イエス様を信じ受け入れた人々すべてにその自覚があるかと言えば、そうではないのです。それは、かつての私自身の経験からも言えることであります。私は若い頃から教会に行っており洗礼も受けていたのですけれども、神様から、あるいはイエス様から召し出されたという自覚はまったくありませんでした。その理由はイエス様に出会っていなかったからであります。復活されて後天に戻られたイエス様は肉眼では見ることはできず、御霊によって開かれた霊の目によってはじめて見ることができます。しかし、その当時の私は霊的に盲目でした。このような私でしたから洗礼は受けましたけれども、それは形だけの洗礼であって救いの確信どころか救われていたかどうかもわからない状態でした。そのような者がイエス様のご用に役立たないのはとうぜんで

す。しかし、その私をイエス様はお見捨てになりませんでした。後年になって試練を与えてくださり、自我を砕いて霊の目を開いてくださって、イエス様と霊的な出会いを体験させてくださったのです。

イエス様との出会いを体験すると、この世は自分にとってもはや大切ではなくなり、自分はこの世に属する者からイエス様の恵みによってイエス様に属する者に移し変えていただいたという実感が湧いてきます。イエス様はご自分の弟子たちについて次のようにおっしゃっています。

わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。

（ヨハネの福音書17章16節）

イエス様の恵みによって、この世のものでなくなったキリスト者は、もはやこの世を愛することも、この世に執着することも、この世と妥協することもなくなるはずであります。しかし、実際はどうでしょうか。ヤコブは当時のキリスト者に宛てた手紙の中で、

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

（ヤコブの手紙4章4節）

と書いています。ヤコブは世を愛するキリスト者を「貞操のない人たち」と嘆いています。私もかつては貞操のないキリスト者でした。「この世も大切である」と平気で言っていたような者でありました。しかし、イエス様のあわれみによってイエス様と出会った結果、冒頭のみことばの中で「あなた」とはイエス様が私を指しておっしゃっているのだということがようやくわかったのです。そして、そのように「あなた」という言葉を受け止めることができるようになったときにはじめて、ではどうしたらイエス様が私に仰せられた「終わりまで歩め」という歩みができるのだろうかと考えるようになりました。

終わりまで歩むには

さて、ここに言うところの「終わり」とは、イエス様から召し出された者一人ひとりのこの世のいのちの終わりのことであり、この世の旅路の終わりであります。イエス様によって罪から贖い出され、永遠のいのちを与えられた者には、天国に国籍が与えられていますから、この世はイエス様を信じる者にとっては寄留地であり、信じる者はこの世を旅する旅人であります。そしてその旅の終わりのときと場所は、一人ひとりイエス様がお決めになります。ですから冒頭のみことば、「あなたは終わりまで歩み、休みに入れ」とは、

イエス様が私に「あなたは、この世での信仰の旅路をわたしが定めたときまで歩みなさい。そしてその後は天の御国でわたしのそばで憩いなさい」とおっしゃっているのだと思います。ということはイエス様が「もうよい」とおっしゃるまでは勝手に休むわけにはいかないということです。

このみことばが与えられた年は私の定年退官の年でありました。定年は人生の一つの区切りですから少し休みたいという肉の思いがありました。そのとき与えられたのが「終わりまで歩め」というみことばです。イエス様が「あなたの歩みは、まだ終わりではない」とおっしゃるのでしたら、私の肉は休みたくても休めないのであります。ではどのように歩んだらよいかといえば、パウロが、

さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

（エペソ人への手紙4章1節）

愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。

（ペテロの手紙第一2章11節）

と言っているように歩まなければなりません。しかし、召しにふさわしく歩むことも、肉の欲を遠ざけることも、救われてはいてもまだ肉の衣を着ている者にとっては難しいことです。自分の努力では決してできません。ではどうしたらよいでしょうか。神様はソロモン王を用いて次のようなみことばをくださっています。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

（箴言3章5～6節）

このみことばのとおりであります。霊の目をイエス様にしっかり向けて、イエス様に信頼することだけです。自分に頼らずイエス様に信頼するときに、イエス様は御霊を遣わしてくださり、私たちの霊に欲に打ち勝つ力を与えて御霊に従って歩むようにしてくださいます。パウロが、

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。

（エペソ人への手紙3章16～17節）

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。

（ガラテヤ人への手紙5章16節）

と言っているとおり、御霊に拠り頼むことができるように真剣に祈り求めれば主がそれを可能にしてくださいます。

さらに、イエス様を信じる私たちが疲れて足がよろめくとき、もう休みたいと思うときに、主のみことばが私たちの霊の足を支え、力づけてくださいます。

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ書46章3～4節）

主は仰せられた。「まことに彼らはわたしの民、偽りのない子たちだ。」と。こうして主は彼らの救い主になられた。彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔から

ずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ書63章8～9節）

「足跡」という詩があります。あるキリスト者が夢の中で自分の苦しいときに、振り返って自分のたどってきた足跡を見たら、ひとりの足跡しかなかった。そういうときになぜイエス様がともにいてくださらなかったのかと悲しんでいたら、イエス様は「それはわたしの足跡である。あなたの苦しいときに、わたしはあなたを抱いていたのである」とおっしゃった、という意味の詩であります。私たちも「主がどんなときにも私を背負ってくださり、抱いてくださっている」と確信するならば、イエス様にすがって終わりまで歩むことができます。

神の相続人の証拠

私たちがイエス様から遣わされた者として福音を伝えようとすればするほどサタンの攻撃は激しくなります。しかし、そのような試練こそ神様の相続人であるという証拠だとパウロは言っています。

私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかし

してくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。

（ローマ人への手紙8章16～17節）

そして何よりも、イエス様の召しに従って歩む者にはすべてにまさる大きな希望が与えられています。それはイエス様が約束してくださった天国への希望であります。

義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。

（マタイの福音書5章10～12節）

この希望がありますから、たとえこの世において迫害に会っても、イエス様を信じる私たちはパウロが言っているように天国を待ち望みつつ耐え忍ぶことができるのです。

今の時のいろいろな苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べ

れば、取るに足りないものと私は考えます。

（ローマ人への手紙8章18節）

あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ

イエス様はご自分のメッセージ、すなわち福音を伝える使命を私たちキリスト者に託されました。福音を伝えるにはサタンと戦わなければなりません。しかし、この戦いのために召し出された者は、足ものろく、知恵も力も勇気もありません。けれどもイエス様はこのような者を用いてご自身の栄光を現わされます。

兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

（コリント人への手紙第一 1章26～29節）

イエス様の前でだれをも誇らせないようにするために、私たちのような愚かで無力な者をイエス様はご自分の戦いのために召されたのであります。ですから私たちはそのようなことで恐れることも、思い煩うこともないのです。私たちはただつぶやかないで、疑わないで、イエス様に結びついて終わりまで歩めばよいということであります。そのように歩む者に対してイエス様は冒頭のみことばのように、

あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。

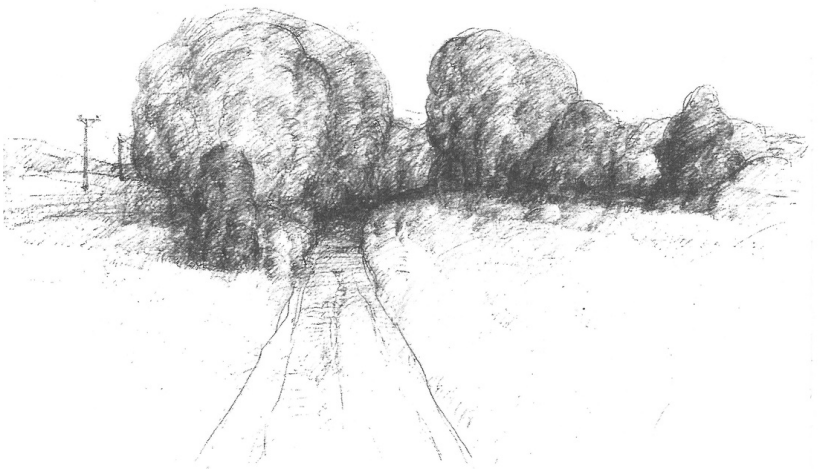
（ダニエル書12章13節）

と約束してくださっているのです。

私たちにはイエス様を信じる者に恵みとして約束されている割り当ての地が天の御国に用意されています。そしてイエス様から「もう歩まなくてもよい。休みに入れ」と言われたそのときに、このすばらしい天の御国に割り当てられた相続地にはいることができるのです。なんと光栄なことでありませんか。

休みたいと思っていた私も、このような多くのさとしと励ましを主イエス様からいただ

いて、それ以来八年の間貧しい歩みではありましたが、このような者を召してくださったイエス様の一方的な恵みとあわれみに感謝しながら日々歩ませていただいてまいりました。これからもイエス様が私の前に敷いてくださった天の御国を目指すこの世の旅路を終わりまで主にしっかり拠り頼みながら歩み続けさせていただけるようにと祈る毎日であります。



コッツウォルズの道
イングランド

■著者略歴■
重田　定義
1927年東京で生まれる
1950年慶応義塾大学医学専門部卒業
1967年慶応義塾大学助教授（医学部・衛生学公衆衛生学）
1974年東海大学教授（医学部・衛生学）
現在東海大学名誉教授　医学博士
著書（福音関係）
『私たちの国籍は天にあります』（やさしい聖書の福音メッセージ集）
『医者に治せない病気』
『みことばは食べるもの』（福音メッセージ集）
『仮の住まいと永遠の住まい』（福音メッセージ集）
『私たちはキリストに会った』（わかりやすい福音メッセージⅢ）一粒社
『新しい天地と古い天地』（福音メッセージ集）

本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳聖書」から引用しています。

何を求めて生きるか　定価300円（本体286円＋税）

2000年12月1日　初版発行
2001年10月1日　第2刷

著　者　重田定義
発行者　重田定義
〒167-0033　東京都杉並区清水2-8-12
印刷・製本　新生宣教団

定価300円（本体286円＋税）